HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第４章　基礎学校におけるサーミの教育の現状と課題
Author(s)	上山, 浩次郎; 野崎, 剛毅
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 34, 63-101
Issue Date	2016-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61379
Type	departmental bulletin paper
File Information	400_ch4.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第４章　基礎学校におけるサーミの教育の現状と課題

上山浩次郎｜北海道大学大学院教育学研究院助教
野崎　剛毅｜札幌国際大学短期大学部准教授

はじめに

本章では、フィンランドの基礎学校におけるサーミの教育の現状と課題について検討する。序章で述べられているように、フィンランドでは1970年代以降、サーミ政策がとりわけ教育の分野で進んだ。その意味で、フィンランドにおけるサーミの状況を理解する上で、サーミの教育の現状を把握することには重要な意味があろう。

本章では、この点をふまえ、サーミの教育のうち、とくに基礎学校におけるサーミの教育に焦点をあててその現状と課題を検討する。そこで、まず、フィンランドの教育制度を概観したのち（第１節）、フィンランドにおけるサーミの教育の歴史的な変遷を先行研究や統計資料によりながら整理する（第２～３節）。その上で、イナリ基礎学校の教師・保護者・生徒の意識と生活に関してアンケート調査にもとづきながら検討を加える（第４～７節）。

第１節　フィンランドの教育制度

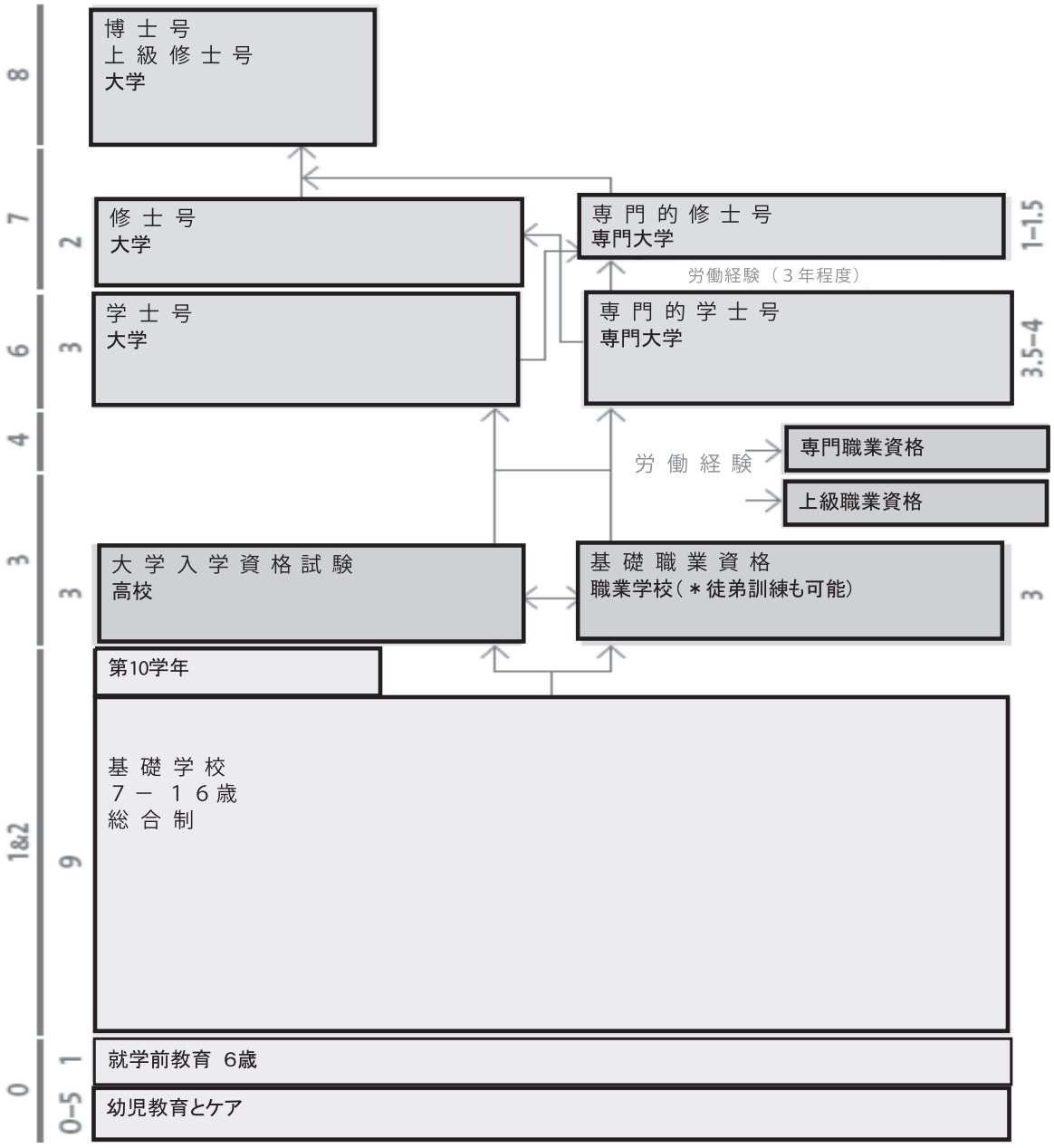
第１項　概要

フィンランドの教育制度は図４－１のように示される[1)]。まず、初等教育・前期中等教育レベルの教育を担う機関として基礎学校がある。それは、入学が７歳からなされる９年制の義務教育を提供する。その意味で、初等教育と前期中等教育は分離されてはいない。ただし、１～６年生までは学級担任が多くの教科を担当し、７～９年生では教科担任が各教科を担当するようになる。また、自発的な追加の学年として「第10学年」という形で基礎学校に通うこともできる[2)]。こうした基礎学校の入学前には、６歳児を対象とした義務教育としての就学前教育が存在している。そこでは、遊びを通した学習を本質としながら、基礎的なスキルや知識などの習得が図られる。こうした就学前教育は、基礎学校やデイケアセンターにおいて提供される。

基礎学校卒業者の９割以上の者が後期中等教育機関へと進路選択をする。そうした後期中等教育機関としては、一般教育を提供する高校と職業教育訓練を提供する職業学校がある。一般教育を提供する高校では、後述する高等教育機関である大学への入学資格の取得が目指され、職業教育訓練を提供する職業学校では、基礎職業資格の取得が目指される。それらはともに、おおよそ３年間で修了することができる。

高等教育レベルの教育を提供する機関としては、学術志向の大学と職業志向の専門大学がある。その意味で高等教育は二元型の構造となっている。大学では、はじめに３年制の学士課程を終えた後に２年制の修士課程に通うことになる。ただ、修士課程の修了は平均して６年程度かかる。専門大学では、学士課程レベルの教育を3.5～４年間で提供する。また、最低３年間の労働経験をふまえた後に、１～1.5年ほどかかる修士課程レベルも存在している。

このようなフィンランドの教育制度は、おおよそ1970年代以降、漸進的に形成されてきたといってよい[3)]。まず、福祉国家の形成の一環として、1972～1977年にかけて、それ以前の分岐型的な基礎教育のあり方から、現在の総合制学校としての基礎学校が導入された。ただし、当初は、現行の９年制ではなく６・３制であり、９年制は1998年の基礎学校法改正により実現した。また、1980年代には、職業教育を中心とした後期中等教育の改革が進み、1990年代には、試験的な取り組みをふまえた後に、専門大学が制度化された（Virolainen and Stenström 2015）。そして、2000年代には、就学前教育が自治体の設置義務として制度化（就学は任意）された後、2015年８月から義務教育となった（渡邉2015）。このように現在のフィンランドの教育制度は、おおよそ40年間以上の漸進的なプロセスの中で形成されてきた。



出所：FNBE（2015）p.3

図４－１　フィンランドの教育

第２項　特徴

フィンランドの教育の主要な原理の１つとして、質の高い教育・訓練への機会の平等がある。それゆえ、民族的な出自・年齢・経済的な富・居住地に関わりなく教育に関して等しい機会を提供することが目指される（FNBE 2015：6）。

こうした理念を背景として、第１に、フィンランドの教育には無償制という特徴が見られる。それは、就学前教育から高等教育というすべてのレベルにあてはまる。就学前教育と基礎学校では、教科書・給食費などが無償となっている。後期中等教育と高等教育では、生徒・学生は教科書を購入しなければならないものの、後期中等教育の生徒は食費無償の権利があり、高等教育での食費は国からの補助がある（FNBE 2015：6）。

また、第２に、言語的なマイノリティや移民に対してのサポートが提供されている。フィンランドの公用語は、フィンランド語とスウェーデン語の２つである。基礎学校の生徒の約５％程度が、教授言語がスウェーデン語の学校に通学しており、またスウェーデン語系の高等教育機関も存在している。サーミ語に関しては、サーミエリアの自治体は、サーミ語の教育を組織することが求められている。学校は、サーミや移民の子どものための公用語を用いた授業や母語を用いた授業のための追加的な補助金に申請することができる（FNBE 2015：8）。

他方で、第３に、フィンランドの教育ガバナンスは、地方分権の原理にもとづいていると評価されている[4)]。実際、教育行政は、国が基盤整備を行い地方が実施するという役割分担のもと遂行されている。国の主要な教育行政機関としては､教育文化省と国家教育委員会がある。教育文化省は、政策立案と予算編成とともに高等教育の所管を行う。国家教育委員会は、就学前教育・基礎教育・中等教育・職業教育訓練の実施に責任を持つとともに、高等教育の入学者選抜を担当し、さらに主な業務として教育課程基準の編成や職業資格の設定がある。地方の教育行政は基礎自治体が担っている。そこでは、高等教育以外の教育サービスが担当されている。基礎自治体は、上でふれた国レベルの教育行政機関が定めた方向性に即すことを前提としながら、教育課程・教職員人事・学校教育費の予算規模や使途など広範囲に及ぶ裁量を有している（渡邊 2013b, 2014）。

これに関連して、第４に、カリキュラムが国―地方―学校という三層構造となっている（渡邊 2011）。すなわち、先にふれた国家教育委員会が定めた教育課程基準にもとづき、基礎自治体が地方カリキュラムを編成し、さらにこれにもとづいて学校が学校カリキュラムを編成するという構造を持っている。その意味で、地方や学校現場の裁量を高め、その意味でその地方や学校に即した教育内容を提供しようとしている。

また、第５に、カリキュラムに関しては、言語教育の重視[5)]という特徴を持つとも評価されている（渡邊 2011, 2013a）。そのうちとくに母語教育はすべての教科の基本として捉えられている。このことは、教育課程基準の授業時数配分の多さ（渡邊 2013a：表３）に象徴的に示されている。また、大学入学資格試験に関しては４つの科目を受験する必要があるが、母語のみが必修となっている（FNBE 2015：19-20）[6)]。

さらに、第６に、教員が高水準に教育されているという特徴も存在する（FNBE 2015：24-25）。たとえば、就学前教育と義務学校の教員には修士号が求められる。義務学校のうち１－６学年を担当する学級担任の教員には教育学の修士号が、７－９学年向けの教科を担当する教科担任の教員には該当する教科に関連した修士号と教職課程の履修が求められる。

第２節　フィンランドにおけるサーミの教育の動向[7)]

フィンランドにおけるサーミの教育は、ノルウェーやスウェーデンから遅れておおよそ1970年代から開始されたといってよい（庄司 1990, 1991）。その当時、サーミの教育に関する問題に取り組むためのいくつかの専門委員会が設置され、多くの報告書が提出された[8)]。それらの中では、当面の提案として、初等教育においてサーミ語による授業と予備段階としてのサーミ語の授業の実現、またそのための教師の養成、教科書の作成の必要性が述べられていた（庄司 1991）。

このような動向を受けて、1972年頃には教科書の試作が開始され、1973年にはセヴェッティヤルヴィの学校で母語としてのスコルト・サーミ語の授業が試験的になされた。また、1975年には、ウツヨキとイナリの６つの基礎学校の下級学年でサーミ語による授業が試験的に始まった[9)]。さらに、1976年には、ラッピ県にサーミ語教材開発や教育企画を行うサーミ教育企画課が設置された（庄司 1991）。

1980年代になると、サーミの教育は大きく進展した。まず、1980年には大学入学資格試験の第二外国語として北サーミ語が選択可能になった（Kulonen, Seurujärvi-Kari and Pulkkinen eds. 2005：92）。また、1983年に基礎学校法と高校教育法が改正され、一方で、サーミエリアの基礎学校において、サーミ語が教授言語として用いることが可能となるとともに、母語の一部としてもサーミ語が選択可能[10)]となり、他方で、サーミエリアの高校ではサーミ語を教授言語として用いることが可能になった。このように1970年代に開始された試験的な取り組みが法制的なレベルで跡付けられるようになった。

その結果、1980年代の終わりには、サーミエリアのすべての学校で、サーミ語を教授言語とする授業がなされるようになった（Kulonen, Seurujärvi-Kari and Pulkkinen eds. 2005：92）。統計的な数字を見ると、サーミ語の教育を受けた生徒数が1978年の373名から1989年の557名へと変化し、サーミ語を教授言語とした生徒数は1982年の64名から1989年の86名へと変化している（山川 2005：212）[11)]。

1990年代に入ると、まず、1991年に高校において母語としてサーミ語を学習することが可能になり、1995年には基礎学校でもサーミ語を独立した母語科目として学べることになった（Aikio-Puoskari 1998）。また、高校でサーミ語を母語として学べるようになったことに関連して、1994年から大学入学資格試験において母語科目として北サーミ語が選択できるようになった。その後、イナリ・サーミ語が1998年に母語科目と外国語科目として、スコルト・サーミ語が2005年に外国語科目、2012年には母語科目として選択可能になった（山川 2005；Keskitalo, Määttä and Uusiautti. 2012）。さらに、サーミ議会が設立されたことを契機に、1996年以降、ラッピ県のサーミ教育企画課で行われていたサーミ語教材開発などの業務の責任がサーミ議会に移された（Aikio-Puoskari 1998）。

また、1998年には基礎学校法・高等学校法・職業教育法が改正された。そうした一連の法改正の中で注目すべきは、基礎学校法において、はじめて基礎自治体のサーミ語教育に関する義務を明確に規定した点である（山川 2005）。さらに、1990年のはじめから、サーミエリアの基礎自治体は、サーミ語による教育のための学習指導要領[12)]も別途承認する義務が課されている（山川 2005）。

第３節　2000 年代におけるサーミの教育の経験者の推移

第１項　基礎教育

このようにフィンランドにおけるサーミの教育は、1970 年代から法制度のレベルで着実に深化してきた。では、現在の状況はどのようなものとなっているのだろうか。サーミ議会が作成した統計から、母語としてのサーミ語・教授言語としてのサーミ語・選択科目としてのサーミ語のそれぞれの授業を経験した生徒数を確認してみよう。表４－１には、サーミエリアの基礎学校における上記の授業を経験した生徒数を整理してある。

表４－１　基礎学校における母語・教授言語・選択科目としてのサーミ語（生徒数）

			2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
合計	エノンテキオ		115		100	96	82	73	71	72	64	69	60	58
	イナリ		187		150	165	182	184	186	204	203	212	233	224
		イナリ・サーミ語	25		19	18	28	23	21	－	－	48	56	53
		スコルト・サーミ語	23		21	15	14	19	15	－	－	19	20	22
		北サーミ語	139		110	132	140	142	150	－	－	145	157	149
	ソダンキュラ		58		33	49	61	56	47	69	78	90	99	97
	ウツヨキ		106		89	85	78	86	77	79	83	99	107	108
	合計		466		372	395	403	399	381	424	428	470	499	487
教授言語としてのサーミ語	エノンテキオ		28		20	24	23	22	20	27	25	32	25	22
	イナリ		58		45	51	57	55	57	56	56	60	58	69
		イナリ・サーミ語	14		8	8	13	11	12	－	－	15	15	17
		スコルト・サーミ語	5		4	3	2	4	2	－	－	5	0	13
		北サーミ語	39		33	40	42	40	43	－	－	40	43	39
	ソダンキュラ		0		0	0	2	1	1	2	3	3	3	10
	ウツヨキ		68		62	63	57	62	63	67	70	78	79	84
	合計		154		127	138	139	140	141	152	154	173	165	185
母語としてのサーミ語	エノンテキオ		7		7	6	4	10	8	6	0	0	0	0
	イナリ		10		6	5	6	11	6	4	0	5	3	0
		イナリ・サーミ語	0		0	0	0	2	0	－	－	0	3	0
		スコルト・サーミ語	0		1	2	3	4	3	－	－	0	0	0
		北サーミ語	10		5	3	3	5	3	－	－	5	0	0
	ソダンキュラ		0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	ウツヨキ		0		1	0	0	5	2	0	0	0	0	0
	合計		17		14	11	10	26	16	10	0	5	3	0
選択科目としてのサーミ語	エノンテキオ		80		73	66	55	41	43	39	39	37	35	36
	イナリ		119		99	109	119	118	123	144	147	147	172	155
		イナリ・サーミ語	11		11	10	15	10	9	－	－	33	38	36
		スコルト・サーミ語	18		16	10	9	11	10	－	－	14	20	9
		北サーミ語	90		72	89	95	97	104	－	－	100	114	110
	ソダンキュラ		58		33	49	59	55	46	67	75	87	96	87
	ウツヨキ		38		26	22	21	19	12	12	13	21	28	24
	合計		295		231	246	254	233	224	262	274	292	331	302

出所：生徒数はサーミ議会作成資料
　　http://www.samediggi.fi/index.php?option=com_content&task=view&id=63&Itemid=114&lang=finnish
備考：就学前教育（０学年＝６歳）含む
　　：ソダンキュラはサーミエリア以外の地域も含む
　　：2004年はサーミ議会のHPに資料なし、2010－2011年はイナリ地域の言語の内訳は不明
　　：2003年は2003－2004年の期間、以下同様

表４－２　基礎学校における母語・教授言語・選択科目としてのサーミ語（割合）

			2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
合計	エノンテキオ		45.6%		43.1%	44.2%	40.8%	42.2%	42.8%	46.2%	41.6%	43.9%	41.7%	44.3%
	イナリ		20.9%		18.0%	20.5%	23.1%	25.9%	27.4%	32.3%	33.6%	36.1%	38.4%	37.6%
		イナリ・サーミ語	2.8%		2.3%	2.2%	3.5%	3.2%	6.0%	－	－	8.2%	9.2%	8.9%
		スコルト・サーミ語	2.6%		2.5%	1.9%	1.8%	2.7%	2.2%	－	－	3.2%	3.3%	3.7%
		北サーミ語	15.6%		13.2%	16.4%	17.7%	20.0%	19.2%	－	－	24.7%	25.9%	25.0%
	ソダンキュラ		4.8%		2.8%	4.3%	5.8%	5.6%	5.0%	7.8%	9.1%	10.6%	11.6%	12.1%
	ウツヨキ		75.2%		71.2%	75.2%	75.0%	85.1%	72.0%	71.2%	75.5%	79.8%	83.6%	77.1%
	合計		18.6%		15.7%	17.4%	18.8%	20.2%	20.2%	23.8%	24.8%	27.3%	28.9%	29.2%
教授言語としてのサーミ語	エノンテキオ		11.1%		8.6%	11.1%	11.4%	12.7%	12.0%	17.3%	16.2%	20.4%	17.4%	16.8%
	イナリ		6.5%		5.4%	6.3%	7.2%	7.7%	8.4%	8.9%	9.3%	10.2%	9.6%	11.6%
		イナリ・サーミ語	1.6%		1.0%	1.0%	1.6%	1.5%	1.8%	－	－	2.6%	2.5%	2.9%
		スコルト・サーミ語	0.6%		0.5%	0.4%	0.3%	0.6%	0.3%	－	－	0.9%	0.0%	2.2%
		北サーミ語	4.4%		4.0%	5.0%	5.3%	5.6%	6.3%	－	－	6.8%	7.1%	6.6%
	ソダンキュラ		0.0%		0.0%	0.0%	0.2%	0.1%	0.1%	0.2%	0.4%	0.4%	0.4%	1.2%
	ウツヨキ		48.2%		49.6%	55.8%	54.8%	61.4%	58.9%	60.4%	63.6%	62.9%	61.7%	60.0%
	合計		6.2%		5.4%	6.1%	6.5%	7.1%	7.5%	8.5%	8.9%	10.1%	9.5%	11.1%
母語としてのサーミ語	エノンテキオ		2.8%		3.0%	2.8%	2.0%	5.8%	4.8%	3.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	イナリ		1.1%		0.7%	0.6%	0.8%	1.5%	0.9%	0.6%	0.0%	0.9%	0.5%	0.0%
		イナリ・サーミ語	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	0.0%	－	－	0.0%	0.5%	0.0%
		スコルト・サーミ語	0.0%		0.1%	0.2%	0.4%	0.6%	0.4%	－	－	0.0%	0.0%	0.0%
		北サーミ語	1.1%		0.6%	0.4%	0.4%	0.7%	0.4%	－	－	0.9%	0.0%	0.0%
	ソダンキュラ		0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	ウツヨキ		0.0%		0.8%	0.0%	0.0%	5.0%	1.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	合計		0.7%		0.6%	0.5%	0.5%	1.3%	0.8%	0.6%	0.0%	0.3%	0.2%	0.0%
選択科目としてのサーミ語	エノンテキオ		31.7%		31.5%	30.4%	27.4%	23.7%	25.9%	25.0%	25.3%	23.6%	24.3%	27.5%
	イナリ		13.3%		11.9%	13.6%	15.1%	16.6%	18.1%	22.8%	24.3%	25.0%	28.4%	26.1%
		イナリ・サーミ語	1.2%		1.3%	1.2%	1.9%	1.4%	4.3%	－	－	5.6%	6.3%	6.1%
		スコルト・サーミ語	2.0%		1.9%	1.2%	1.1%	1.5%	1.5%	－	－	2.4%	3.3%	1.5%
		北サーミ語	10.1%		8.6%	11.1%	12.0%	13.7%	12.4%	－	－	17.0%	18.8%	18.5%
	ソダンキュラ		4.8%		2.8%	4.3%	5.6%	5.5%	4.9%	7.6%	8.8%	10.2%	11.3%	10.8%
	ウツヨキ		27.0%		20.8%	19.5%	20.2%	18.8%	11.2%	10.8%	11.8%	16.9%	21.9%	17.1%
	合計		11.8%		9.8%	10.9%	11.8%	11.8%	11.9%	14.7%	15.9%	17.0%	19.1%	18.1%

		2003		2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
エノンテキオ	6－15歳人口	252		232	217	201	173	166	156	154	157	144	131
イナリ	6－15歳人口	893		833	804	789	710	678	632	604	587	606	595
ソダンキュラ	6－15歳人口	1215		1177	1130	1051	995	933	881	856	851	851	803
ウツヨキ	6－15歳人口	141		125	113	104	101	107	111	110	124	128	140
Total	6－15歳人口	2501		2367	2264	2145	1979	1884	1780	1724	1719	1729	1669

出所：生徒数はサーミ議会作成資料
　　http://www.samediggi.fi/index.php?option=com_content&task=view&id=63&Itemid=114&lang=finnish
　　：６－15歳人口は、Statistics Finland's PX-Web databasesから作成
　　（PX-Web Statfin in English 〉〉 Population 〉〉 Population Structureの13）
備考：就学前教育（０学年＝６歳）含む
　　：ソダンキュラはサーミエリア以外の地域も含む
　　：2004年はサーミ議会のHPに資料なし、2010－2011年はイナリ地域の言語の内訳は不明
　　：2003年は2003－2004年の期間、以下同様

それによれば、2003年の466人から2014年の487人へと増加している。ただ、2013年の499人から見ると減少している。とはいえ、2005年から2009年までは372～403人であり、その意味で増加傾向は見られる。

また、この期間は基礎学校に該当する年齢の人口が減少している。表４－２にそれを示した。それによれば、2003年の2,501人から2014年の1,669人へと減少している。長期的に見れば前年度とくらべて若干増加した年度もあるが総じて減少傾向が見られる。そこで､該当する人口（６－15歳）を分母に、サーミ語の授業を経験した生徒数を分子にした割合を確認してみよう。表４－２にそれを示した。それによれば、2003年の18.6％から2014年の29.2％へと増加している。

では、どのような授業を経験した者が増えているのだろうか。同じく表４－２を確認すると､「教授言語としてのサーミ語」の授業を経験した者は、2003年の6.2％から2014年の11.1％へと増加している。また､「選択科目としてのサーミ語」を経験した者は、2003年の11.8％から2014年の18.1％へと増加している。「母語としてのサーミ語」はすべての年度で１％以下となっている。その意味で、サーミ語の授業の経験者の割合の増加は､「教授言語としてのサーミ語」と「選択科目としてのサーミ語」の授業経験者の増加によってもたらされている。

地域別に見ると、2014年において最も授業経験者割合が高いのはウツヨキの77.1％である。次に値が高いのはエノンテキオの44.3％であり、イナリは37.6％、ソダンキュラは12.1％となっている。こうした順序は、2003年にも同様で、ウツヨキは75.2％、エノンテキオは45.6％、イナリは20.9％、ソダンキュラは4.8％となっている。

さらに、それぞれの地域内部の時系列的な動向を確認しよう。まず、エノンテキオの場合、何らかの形でサーミ語の授業を経験した者は2003年の45.6％から2014年の44.3％とやや減少しているが、大きな変化があるとはいえない。ただし､「教授言語としてのサーミ語」を経験した者は、長期的に見れば2003年の11.1％から2014年の16.8％へと増加傾向が見られる。他方で､「選択科目としてのサーミ語」は2003年の31.7％から2014年の27.5％へと低下している。また2008～2013年にかけては25.0％程度以下となっていた。この点をふまえれば、エノンテキオの場合、全体的な経験者割合には変動が見られないものの、経験した授業の内容には変化が見られたといえるかもしれない。

イナリの場合、2003年の20.9％から2014年の37.6％へと増加している。こうした増加傾向は2006年以降一貫して見られる。「教授言語としてのサーミ語」は2003年の6.5％から2014年の11.6％へと増加している。また「選択科目としてのサーミ語」も2003年の13.3％から2014年の26.1％へと増加している。その意味で、これら２つの授業の経験者割合が増加したために全体的な経験者の割合も増加したと判断できる。

ソダンキュラの場合も、2003年の4.8％から2014年の12.1％へと増加している。ソダンキュラでは「教授言語としてのサーミ語」はほぼ見られない。2014年においてはじめて１％を超えた。それゆえ、全体的な傾向は､「選択科目としてのサーミ語」の動向とほぼ同一となっている。実際、その経験者の割合は2003年の4.8％から2014年の10.8％と全体的な傾向とほぼ同様の値となっている。

ウツヨキの場合、2003年の75.2％から2014年の77.1％とやや増加しているものの、大きな変動があったとはいいがたい。ただ、2008年と2013年には８割を超えたこともある一方、2005年と

2010年には71.2％とやや低くなったこともある。とはいえ、おおよそ７～８割程度の者が経験しているという判断はできよう。しかし、授業の内容に大きな変化が見られた点には注意しておく必要がある。すなわち、「教授言語としてのサーミ語」は、2003年では48.2％であったものの2008年以降はおおよそ６割程度で推移している。他方で、「選択科目としてのサーミ語」は、2003年の27.0％から2014年の17.1％へと低下している。さらに、2009～2011年には10.8～11.8％にもなっていた。

第２項　高校

次に、高校におけるサーミ語授業の経験者を確認しよう。表４－３にその生徒数を、表４－４に割合を示した[13)]。表４－４によれば、2003年で12.1％、2014年で13.1％とおおよそ違いが見られない。ただし、2010年には6.4％、2011年には7.9％とやや値が低くなっている。

授業内容別に見ると、「母語としてのサーミ語」が2003年の3.4％から2012年の6.5％、2013年の6.9％と増加している。ただし、2014年には5.0％とやや値が低下している。「選択科目としてのサーミ語」は、2003年で8.1％、2014年で8.1％と違いが見られない。ただし、2010年には3.2％、2011年には3.7％と値が低くなっている。この年度は、さきほど確認したように全体の割合も値が低くなっていた。それゆえ、選択科目としてサーミ語があまり選択されなかった年度において全体的な経験者割合も低下しているといえる。

地域別に見ると、2014年において、ウツヨキが66.7％となっており最も授業を経験した者の割合が高い。続けて高いのはイナリで14.7％、エノンテキオで9.1％、ソダンキュラで0.7％となっている。ただし、2003年を見ると、ウツヨキで37.3％、エノンテキオで23.5％、イナリで10.8％と、ソダンキュラで0.7％と、エノンテキオの方がイナリよりも経験者割合が高かった。

そこで、地域別に時系列的な変化を確認してみよう。まず、エノンテキオの場合、2003年の23.5％だったものが2009年に12.9％となり、さらに2014年には9.1％となっている。ただし、2011年には18.6％である一方、2013年では2.3％に過ぎない。このように見れば、長期的に見てやや低下傾向が見られるといえるものの、年度によって大きく変動してきたといえる。授業内容を見ると、「母語としてのサーミ語」が2003年の11.1％から2014年の5.5％と低下している。ただ、2011年では11.9％であるのに対し、2013年では2.3％になっている。このように見れば「母語としてのサーミ語」は年度間の変動が大きい。他方で、「選択科目としてのサーミ語」は、2003年の12.3％から2014年の3.6％と低下している。これは2005～2013年にかけておおよそ一貫して存在している傾向といえる。このように見れば、全体的な低下傾向は、主に「選択科目としてのサーミ語」の動向に起因し、年度間で見られる変動は主に「母語としてのサーミ語」の動向に起因しているといえるかもしれない。

イナリの場合、2003年の10.8％から2014年の14.7％へと増加している。2005～2006年には7.2％だった点をふまえれば長期的に見ても増加傾向にあるといえる。「母語としてのサーミ語」は2003年に2.3％であったものが、2013年には7.3％になっている。ただし2014年では4.9％と値を低下させている。他方で、「選択科目としてのサーミ語」は、2003年の8.5％から2005年の4.4％へと値を低下させているものの、それ以降はおおよそ４～５％で推移し、2014年には9.8％となっている。

表４－３　高校における母語・教授言語・選択科目としてのサーミ語（生徒数）

			2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
合計	エノンテキオ		19		16	17	10	10	9	10	11	7	1	5
	イナリ		28		18	19	25	28	29	25	27	28	29	27
		イナリ・サーミ語	5		2	2	1	2	3	－	－	1	1	3
		スコルト・サーミ語	5		2	0	0	0	2	－	－	6	5	1
		北サーミ語	18		14	17	24	26	24	－	－	21	23	23
	ソダンキュラ		3		2	3	3	6	5	4	4	2	3	2
	ウツヨキ		22		16	16	12	11	4	7	11	9	17	10
	合計		100		70	74	75	83	76	46	53	74	79	71
教授言語としてのサーミ語	エノンテキオ		0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	イナリ		0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		イナリ・サーミ語	0		0	0	0	0	0	－	－	0	0	0
		スコルト・サーミ語	0		0	0	0	0	0	－	－	0	0	0
		北サーミ語	0		0	0	0	0	0	－	－	0	0	0
	ソダンキュラ		0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	ウツヨキ		5		7	0	7	4	3	0	0	3	0	0
	合計		5		7	0	7	4	3	0	0	3	0	0
母語としてのサーミ語	エノンテキオ		9		6	3	4	4	4	5	7	5	1	3
	イナリ		6		7	8	13	13	16	13	15	16	15	9
		イナリ・サーミ語	0		0	0	0	0	0	－	－	0	1	2
		スコルト・サーミ語	0		0	0	0	0	1	－	－	5	3	0
		北サーミ語	6		7	8	13	13	15	－	－	11	11	7
	ソダンキュラ		0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	ウツヨキ		7		3	9	1	5	0	5	6	2	7	6
	合計		28		23	28	31	35	36	23	28	39	38	27
選択科目としてのサーミ語	エノンテキオ		10		10	14	6	6	5	5	4	2	0	2
	イナリ		22		11	11	12	15	13	12	12	12	14	18
		イナリ・サーミ語	5		2	2	1	2	3	－	－	1	0	1
		スコルト・サーミ語	5		2	0	0	0	1	－	－	1	2	1
		北サーミ語	12		7	9	11	13	9	－	－	10	12	16
	ソダンキュラ		3		2	3	3	6	5	4	4	2	3	2
	ウツヨキ		10		6	7	4	2	1	2	5	4	10	4
	合計		67		40	46	37	44	37	23	25	32	41	44

出所：生徒数はサーミ議会作成資料
　　http://www.samediggi.fi/index.php?option=com_content&task=view&id=63&Itemid=114&lang=finnish
備考：ソダンキュラはサーミエリア以外の地域も含む
　　：2004年はサーミ議会のHPに資料なし、2010－2011年はイナリ地域の言語の内訳は不明
　　：2003年は2003－2004年の期間、以下同様

表４－４　高校における母語・教授言語・選択科目としてのサーミ語（割合）

			2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
合計	エノンテキオ		23.5%		17.6%	19.8%	13.0%	13.2%	12.9%	15.2%	18.6%	14.3%	2.3%	9.1%
	イナリ		10.8%		7.2%	7.2%	9.1%	9.8%	10.2%	9.2%	11.3%	12.5%	14.1%	14.7%
		イナリ・サーミ語	1.9%		0.8%	0.8%	0.4%	0.7%	1.1%	－	－	0.4%	0.5%	1.6%
		スコルト・サーミ語	1.9%		0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%	－	－	2.7%	2.4%	0.5%
		北サーミ語	6.9%		5.6%	6.5%	8.8%	9.1%	8.5%	－	－	9.4%	11.2%	12.5%
	ソダンキュラ		0.7%		0.5%	0.8%	0.8%	1.6%	1.4%	1.1%	1.2%	0.7%	1.1%	0.7%
	ウツヨキ		37.3%		30.8%	34.0%	29.3%	27.5%	13.8%	30.4%	42.3%	36.0%	63.0%	66.7%
	合計		12.1%		9.2%	9.6%	9.6%	10.7%	10.2%	6.4%	7.9%	12.3%	14.3%	13.1%
教授言語としてのサーミ語	エノンテキオ		0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	イナリ		0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
		イナリ・サーミ語	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－	0.0%	0.0%	0.0%
		スコルト・サーミ語	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－	0.0%	0.0%	0.0%
		北サーミ語	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－	0.0%	0.0%	0.0%
	ソダンキュラ		0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	ウツヨキ		8.5%		13.5%	0.0%	17.1%	10.0%	10.3%	0.0%	0.0%	12.0%	0.0%	0.0%
	合計		0.6%		0.9%	0.0%	0.9%	0.5%	0.4%	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%
母語としてのサーミ語	エノンテキオ		11.1%		6.6%	3.5%	5.2%	5.3%	5.7%	7.6%	11.9%	10.2%	2.3%	5.5%
	イナリ		2.3%		2.8%	3.0%	4.7%	4.5%	5.7%	4.8%	6.3%	7.1%	7.3%	4.9%
		イナリ・サーミ語	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	－	－	0.0%	0.5%	1.1%
		スコルト・サーミ語	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	－	－	2.2%	1.5%	0.0%
		北サーミ語	2.3%		2.8%	3.0%	4.7%	4.5%	5.3%	－	－	4.9%	5.4%	3.8%
	ソダンキュラ		0.0%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	ウツヨキ		11.9%		5.8%	19.1%	2.4%	12.5%	0.0%	21.7%	23.1%	8.0%	25.9%	40.0%
	合計		3.4%		3.0%	3.6%	4.0%	4.5%	4.8%	3.2%	4.2%	6.5%	6.9%	5.0%
選択科目としてのサーミ語	エノンテキオ		12.3%		11.0%	16.3%	7.8%	7.9%	7.1%	7.6%	6.8%	4.1%	0.0%	3.6%
	イナリ		8.5%		4.4%	4.2%	4.4%	5.2%	4.6%	4.4%	5.0%	5.4%	6.8%	9.8%
		イナリ・サーミ語	1.9%		0.8%	0.8%	0.4%	0.7%	1.1%	－	－	0.4%	0.0%	0.5%
		スコルト・サーミ語	1.9%		0.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.4%	－	－	0.4%	1.0%	0.5%
		北サーミ語	4.6%		2.8%	3.4%	4.0%	4.5%	3.2%	－	－	4.5%	5.9%	8.7%
	ソダンキュラ		0.7%		0.5%	0.8%	0.8%	1.6%	1.4%	1.1%	1.2%	0.7%	1.1%	0.7%
	ウツヨキ		16.9%		11.5%	14.9%	9.8%	5.0%	3.4%	8.7%	19.2%	16.0%	37.0%	26.7%
	合計		8.1%		5.2%	6.0%	4.7%	5.7%	5.0%	3.2%	3.7%	5.3%	7.4%	8.1%

		2003		2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
エノンテキオ	16-18	81		91	86	77	76	70	66	59	49	44	55
イナリ	16-18	260		251	263	274	287	283	271	238	224	205	184
ソダンキュラ	16-18	424		368	373	389	375	364	363	345	305	277	286
ウツヨキ	16-18	59		52	47	41	40	29	23	26	25	27	15
Total	16-18	824		762	769	781	778	746	723	668	603	553	540

出所：生徒数はサーミ議会作成資料
　　http://www.samediggi.fi/index.php?option=com_content&task=view&id=63&Itemid=114&lang=finnish
　　：16－18歳人口は、Statistics Finland's PX-Web databasesから作成
　　（PX-Web Statfin in English 〉〉 Population 〉〉 Population Structureの13）
備考：ソダンキュラはサーミエリア以外の地域も含む
　　：2004年はサーミ議会のHPに資料なし、2010－2011年はイナリ地域の言語の内訳は不明
　　：2003年は2003－2004年の期間、以下同様

ソダンキュラの場合、すべての年度で「選択科目としてのサーミ語」しか経験者がいない。また、その経験した者の割合はおおよそ1%程度となっている。

ウツヨキの場合、2003年の37.3%から2014年の66.7%へと増加している。2009年には13.8%となっているものの、おおよそ増加傾向にあると判断できよう。「母語としてのサーミ語」を見ると、2003年の11.9%から2013年の25.9%、2014年の40.0%へと増加している。このように長期的に見れば増加しているものの、2007年で2.4%、2009年で0.0%、2012年で8.0%となっている年度もある。そうした年度には、代わりに「教授言語としてのサーミ語」を経験する者が2007年で17.1%、2009年で10.3%、2012年で12.0%と他の年度と比べて高くなっている。「選択科目としてのサーミ語」は2003年の16.9%から2014年の26.7%と増加している。2010年以前（除：2003年）は15%以下であり、2011年以降は15%以上という意味でおおよそ増加傾向が見られる。2008年の5.0%、2009年の3.4%ととくに値が低くなっている年度では、ここでも「教授言語としてのサーミ語」の値が他の年度と高くなっている。

以上のように見てくると、エノンテキオではおおよその低下傾向、イナリとウツヨキでは増加傾向、ソダンキュラでは経年的な値の低さという特徴が見てとれる。加えて、エノンテキオ、イナリ、ウツヨキでは、年度によって経験者の割合が大きく変動するという特徴も見られる。

本項の最後に、基礎学校と高校の相違点を確認することでそれらの特徴を確認しておこう。まず、第1に、基礎学校と高校では、サーミ語の授業を経験する者の割合が異なっている。具体的には、基礎学校ほどサーミ語の授業を経験する者の割合が高い。たとえば、2014年を見ると、基礎学校の場合、エノンテキオで44.3%、イナリで37.6%、ソダンキュラで12.1%、ウツヨキで77.1%であるのに対し、高校の場合、エノンテキオで9.1%、イナリで14.7%、ソダンキュラで0.7%、ウツヨキで66.7%となっていたのであった

次に、第2に、授業内容についても違いが見られた。具体的には、基礎学校では「教授言語としてのサーミ語」が多く経験されている一方「母語としてのサーミ語」がほぼ経験されていないのに対し、高校では「教授言語としてのサーミ語」がほぼ経験されていない一方「母語としてのサーミ語」を経験している者が一定数見られたのであった。

さらに、第3に、時系列的な変動のあり方に関しても違いが見られた。基礎学校の場合、エノンテキオやウツヨキでは大きな違いが見られない一方イナリとソダンキュラでは増加傾向が見られ、サーミエリア全体としては、サーミ語の授業を経験する者の割合が増加していた。高校の場合、イナリとウツヨキでは増加傾向が見られるもののエノンテキオではやや減少傾向が見られる。さらにソダンキュラでは経験者の割合自体がかなりの程度低い。加えて、エノンテキオ、イナリ、ウツヨキでは年度によって経験者の割合が大きく変動する場合も見られた。その意味で、エノンテキオの低下傾向と年度による変動の大きさという点は高校における特徴といえるかもしれない。

第3項　イナリにおける言語別動向

エノンテキオ、ソダンキュラ、ウツヨキでは北サーミ語が用いられるのに対し、イナリではイナリ・サーミ語、スコルト・サーミ語、北サーミ語の3種類が用いられる。そこで、それらの内訳も確認しよう。表4－1と表4－3には、イナリにおいて言語別に見た場合の授業を経験した生徒数も示してある。また、イナリにおける授業経験者数を分母に、各言語の授業経験者数を分子にした

割合を表４－５と表４－６に示した。

表４－５　言語別基礎学校における母語・教授言語・選択科目としてのサーミ語（イナリ）（割合）

		2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
合計	エノンテキオ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	イナリ	1.000		1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
	イナリ・サーミ語	0.134		0.127	0.109	0.154	0.125	0.220	－	－	0.226	0.240	0.237
	スコルト・サーミ語	0.123		0.140	0.091	0.077	0.103	0.081	－	－	0.090	0.086	0.098
	北サーミ語	0.743		0.733	0.800	0.769	0.772	0.699	－	－	0.684	0.674	0.665
	ソダンキュラ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	ウツヨキ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	合計	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
教授言語としてのサーミ語	エノンテキオ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	イナリ	1.000		1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
	イナリ・サーミ語	0.241		0.178	0.157	0.228	0.200	0.211	－	－	0.250	0.259	0.246
	スコルト・サーミ語	0.086		0.089	0.059	0.035	0.073	0.035	－	－	0.083	0.000	0.188
	北サーミ語	0.672		0.733	0.784	0.737	0.727	0.754	－	－	0.667	0.741	0.565
	ソダンキュラ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	ウツヨキ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	合計	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
母語としてのサーミ語	エノンテキオ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	イナリ	1.000		1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	0.000
	イナリ・サーミ語	0.000		0.000	0.000	0.000	0.182	0.000	－	－	0.000	1.000	0.000
	スコルト・サーミ語	0.000		0.167	0.400	0.500	0.364	0.500	－	－	0.000	0.000	0.000
	北サーミ語	1.000		0.833	0.600	0.500	0.455	0.500	－	－	1.000	0.000	0.000
	ソダンキュラ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	ウツヨキ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	合計	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
選択科目としてのサーミ語	エノンテキオ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	イナリ	1.000		1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
	イナリ・サーミ語	0.092		0.111	0.092	0.126	0.085	0.236	－	－	0.224	0.221	0.232
	スコルト・サーミ語	0.151		0.162	0.092	0.076	0.093	0.081	－	－	0.095	0.116	0.058
	北サーミ語	0.756		0.727	0.817	0.798	0.822	0.683	－	－	0.680	0.663	0.710
	ソダンキュラ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	ウツヨキ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	合計	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

出所：生徒数はサーミ議会作成資料
　　http://www.samediggi.fi/index.php?option=com_content&task=view&id=63&Itemid=114&lang=finnish
備考：就学前教育（０学年＝６歳）含む
　　：ソダンキュラはサーミエリア以外の地域も含む
　　：2004年はサーミ議会のHPに資料なし、2010－2011年はイナリ地域の言語の内訳は不明
　　：2003年は2003－2004年の期間、以下同様

表４－６　言語別基礎学校における母語・教授言語・選択科目としてのサーミ語（イナリ）（割合）

		2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
合計	エノンテキオ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	イナリ	1.000		1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
	イナリ・サーミ語	0.179		0.111	0.105	0.040	0.071	0.103			0.036	0.034	0.111
	スコルト・サーミ語	0.179		0.111	0.000	0.000	0.000	0.069			0.214	0.172	0.037
	北サーミ語	0.643		0.778	0.895	0.960	0.929	0.828			0.750	0.793	0.852
	ソダンキュラ												
	ウツヨキ												
	合計												
教授言語としてのサーミ語	エノンテキオ												
	イナリ	0.000		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	イナリ・サーミ語	0.000		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	スコルト・サーミ語	0.000		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	北サーミ語	0.000		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
	ソダンキュラ												
	ウツヨキ												
	合計												
母語としてのサーミ語	エノンテキオ												
	イナリ	1.000		1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
	イナリ・サーミ語	0.000		0.000	0.000	0.000	0.000	0.000			0.000	0.067	0.222
	スコルト・サーミ語	0.000		0.000	0.000	0.000	0.000	0.063			0.313	0.200	0.000
	北サーミ語	1.000		1.000	1.000	1.000	1.000	0.938			0.688	0.733	0.778
	ソダンキュラ												
	ウツヨキ												
	合計												
選択科目としてのサーミ語	エノンテキオ												
	イナリ	1.000		1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000	1.000
	イナリ・サーミ語	0.227		0.182	0.182	0.083	0.133	0.231			0.083	0.000	0.056
	スコルト・サーミ語	0.227		0.182	0.000	0.000	0.000	0.077			0.083	0.143	0.056
	北サーミ語	0.545		0.636	0.818	0.917	0.867	0.692			0.833	0.857	0.889
	ソダンキュラ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	ウツヨキ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
	合計	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

出所：生徒数はサーミ議会作成資料
　　http://www.samediggi.fi/index.php?option=com_content&task=view&id=63&Itemid=114&lang=finnish
備考：ソダンキュラはサーミエリア以外の地域も含む
　　：2004年はサーミ議会のHPに資料なし、2010－2011年はイナリ地域の言語の内訳は不明
　　：2003年は2003－2004年の期間、以下同様

表４－７　母語・教授言語・選択科目としてのサーミ語（サーミエリア外）（基礎・高校生徒数）

	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
基礎学校	－		－	－	29	－	17	24	－	30	42	46
高校	－		－	－	7	－	10	7	－	8	21	26
合計	20		20	42	36	29	27	31	44	38	63	72

基礎学校					80.6%		63.0%	77.4%		78.9%	66.7%	63.9%
高校					19.4%		37.0%	22.6%		21.1%	33.3%	36.1%

出所：生徒数はサーミ議会作成資料
　　http://www.samediggi.fi/index.php?option=com_content&task=view&id=63&Itemid=114&lang=finnish
備考：就学前教育（０学年＝６歳）含む
　　：2004年はサーミ議会のHPに資料なし
　　：2003年は2003－2004年の期間、以下同様

表４－５から基礎学校の場合を確認すると、2014 年において、イナリ・サーミ語を経験した者は 0.240（24.0％）、スコルト･サーミ語は 0.098（9.8％）、北サーミ語は 0.665（66.5％）となっており、北サーミ語が最も多い。ただ、2003 年を見ると、イナリ･サーミ語は 0.134（13.4％）、スコルト･サーミ語は 0.123（12.3％）、北サーミ語は 0.743（74.3％）となっており、2014 年においてイナリ・サーミ語がその比重を高めていることがわかる。

表４－６から高校の場合を確認すると、2014 年において、イナリ･サーミ語を経験した者は 0.111（11.1％）、スコルト・サーミ語は 0.037（3.7％）、北サーミ語は 0.852（85.2％）となっており、高校でも北サーミ語が最も多く経験されている。経年的な変化を見るため 2003 年を見ると、イナリ･サーミ語は 0.179（17.9％）、スコルト･サーミ語は 0.179（17.9％）、北サーミ語は 0.643（64.3％）となっており、イナリ・サーミ語やスコルト・サーミ語がその比重を低下させてきたように見える。イナリ・サーミ語の場合、2012 年には 0.036（3.6％）となった年度さえある。しかし、スコルト・サーミ語の場合、2012 年で 0.214（21.4％）と値を上昇させた年度もある点には注意を払う必要があろう。

本節の最後に、サーミエリア以外の動向についても簡単にふれておく。表４－７によれば 2003 年の 20 人から 2014 年の 72 人へと増加している。表には記載していないが、多くがオウルやロヴァニエミの基礎学校・高校である。また、高校の比重も増加している点も特徴として指摘できるかもしれない。

第４節　調査対象校と調査の概要

第１項　イナリ基礎学校[14)]

サーミの人々の教育の実態と課題を明らかにするため、イナリにある基礎学校の教師と保護者、７～９年生の生徒を対象とした調査を行った。

調査対象校であるイナリ基礎学校は 2015 年８月現在で、就学前クラスから９年生まで 138 人が在籍している。入学時に保護者が子どもの母語を選択することになっており、フィンランドでは唯一、フィンランド語、北サーミ語、イナリ・サーミ語、スコルト・サーミ語の４つの言語から母語を選択できる学校であるという。写真４－１に見られるように、校舎には学習できる４つの言語で学校名が示されている。ただし、2014 年の時点では、北サーミ語、イナリ・サーミ語を母語として選択している児童・生徒はいるものの、スコルト・サーミ語については外国語として履修している者が１人いるだけであった。なお、スコルト・サーミ語を学ぶこの生徒は、130km 離れた町に住む教師と Skype を使って授業をしているという。

通学圏はおおむね学校の周辺 10km ほどである。フィンランドでは学校までの距離が 3km を超える場合は自治体がバスやタクシーを用意しなければならないという規定がある。この制度を使い、片道 63km の道のりをタクシーで通う児童もいるという。

教師は全部で 23 人おり、うち８人がサーミ語担当教師である。５人が北サーミ語、３人がイナリ・サーミ語である。また、非常勤のサーミ語教師が１人いる。なお、サーミ語担当教員については、他の教師とは別の職員室が用意されており、また給与も自治体ではなく国から支給されている。

サーミ語に関する教材はサーミ議会が無償で貸し出している。ただし、イナリ・サーミ語については８年生、９年生の教材がないなど、教師の自助努力によって成り立っている部分も少なくない。



写真４－１　イナリ基礎学校（４つの言語で校名が書かれている）



写真４－２　北サーミ、イナリ・サーミ、スコルト・サーミそれぞれの民族衣装を着た人形

表４－８　イナリ基礎学校学年別在籍者、サーミ語方言履修者

学　　年	人　　数	イナリ・サーミ語	北サーミ語
就学前	21 人	４人	９人
１年生	11 人	４人	１人
２年生	19 人	３人	２人
３年生	13 人	３人	２人
４年生	11 人	２人	１人
５年生	10 人	２人	２人
６年生	15 人	２人	４人
７年生	14 人	１人	１人
８年生	14 人	４人	４人
９年生	10 人	０人	４人
計（含む就学前）	117 人（138 人）	21 人（25 人）	21 人（30 人）

第２項　調査の概要

以降の分析で使用するデータは、2015 年８月に実施した調査で得たものである。調査票は web 上に用意した。イナリ基礎学校を訪問した際に調査の趣旨と調査票の URL が記載された依頼状を学校長へ渡し、各教師、保護者、７年生から９年生の生徒に配布して頂いた。後にお礼状を兼ねた督促状を送った。その結果、教師調査では校長を含む５人から回答を得た。また、保護者調査では 11 人の保護者から、生徒調査では４人の生徒から回答を得ることができた。

第５節　イナリ基礎学校教師の意識

第１項　課題の設定と調査の概要

北欧のサーミが多く住む地域の学校に関しては、これまでにもスウェーデンのサーミ学校、ノルウェーの基礎学校において調査をしてきた。

スウェーデンのサーミ学校に勤務する教師への調査では、①サーミ語教育の教材不足が、教師の高い能力と努力によって補われていること、②サーミの子どもが持つ多様性がほとんど意識されていないこと、③サーミ学校の教師がサーミ社会における「勝ち組」であること、④サーミ文化の復権と再生が教師たちのサーミ社会における成功を実現させたことが指摘されている（新藤 2013：118）。

また、ノルウェーのカウトケイノにある基礎学校の教師調査からは、①基礎学校の教師が高いサーミ語能力を持ち、サーミ語、サーミ文化の教育に熱心に取り組んでいる一方で、教師自身がトナカイを飼っているかどうかといった要素によって、サーミのライフスタイルへの意識に温度差が見られること、②教師たちの多くが、基礎学校からサーミ学校になるべきであると考えていることといった点が指摘された。また、スウェーデンのサーミ学校調査と同様に③教師のサーミ語能力が北サーミ語に偏っていること、④教師たちがサーミ社会における成功者としてみなされうることが確認されている（小野寺 2015：54-56）。

本節では、これらの先行調査の結果をふまえて、イナリ基礎学校における教師の教育実態と意識を検討する。スウェーデン調査はサーミ学校であり、また、ノルウェー調査も生徒のほとんどがサーミである（調査回答者 100 人中 97 人）という極端な環境にある学校で行われた。それに対し本調査の対象校はサーミ学校ではなく一般の基礎学校であり、第４節でも確認したように生徒の過半数はサーミではなくフィンランド人である。一方で、スウェーデン調査やノルウェー調査において「北サーミ語偏重」が指摘されているのに対し、本調査を行ったイナリは北サーミ、イナリ・サーミ、スコルト・サーミの３方言が共存する環境にある。このような環境の違いが教育の実態や教師の意識にどのような影響を与えているのであろうか。

第２項　回答者の基本属性

回答者のうち、校長である E 教諭を除く４人は女性である。全員がフィンランド生まれであり、地域まで回答した C 教諭、D 教諭、E 教諭はイヴァロ出身である。また、出身地の回答はしていないものの A 教諭もイナリの基礎学校、イヴァロの高校を出ている。年齢は A 教諭が 20 代、E 教諭が 30 代、C 教諭と D 教諭が 40 代、B 教諭が 60 代である。A 教諭と C 教諭の２人はサーミであるが、B 教諭と E 教諭はサーミではない。D 教諭は「わからない」としている。

B教諭、C教諭、D教諭、E教諭は大学の修士課程を出ている。また、C教諭は大学の他に専門大学の職業学士課程も卒業している。A教諭はフィンランドの大学､専門大学へは進学しておらず、ノルウェーにあるサーミ大学(Sami University College)を卒業している。教員自身のサーミ語学習、サーミ文化学習歴を見てみると、A教諭とE教諭は基礎学校でこれらを習っており、またA教諭は高校、サーミ大学でも学習しているものの、C教諭は学校でサーミ語・文化の教育を受けていない。また、B教諭もコミュニティ・スクールで学んだだけである。第2節で確認したように、サーミ語教育は1970年代に実験的に始まり、1980年代を通して拡大、法制化されていった。こういった時代にC教諭、D教諭は学校教育を受けていたため、ちょうど制度整備のはざまに入ってしまったものと考えられる。

現在の家族状況は表4－11のとおりである。離死別しているC教諭も含め、全員が結婚を経験しており、またA教諭を除き、子どもがいる。子どもへの学歴期待を見てみると、全員が大学修士課程以上を望んでいる。また、自身もサーミであるA教諭とC教諭は、ノルウェーのサーミ大学も選択肢に入れている。

表4－10　回答者の属性

	性別	年齢	出身国/地	あなたはサーミですか	サーミ語が話せる家族	家族が話せるサーミ語	学歴	サーミ語･文化を学んだ学校
A教諭	女性	20代	フィンランド	サーミ	実母､母方祖母	北サーミ語	Sami University College(ノルウェー)	イナリ基礎学校､イヴァロ高校､サーミ大学
B教諭	女性	60代	フィンランド	サーミではない	いない		大学(修士課程)	イナリのコミュニティ･スクール
C教諭	女性	40代	フィンランド/イヴァロ	サーミ	実父､父方祖母､父方祖父	イナリ･サーミ語	大学(修士課程)､専門大学(職業学士課程)	なし
D教諭	女性	40代	フィンランド/イヴァロ	わからない	配偶者の母､配偶者の妹	イナリ･サーミ語	大学(修士課程)	NA
E教諭	男性	30代	フィンランド/イヴァロ	サーミではない	―	―	大学(修士課程)	イナリ基礎学校

表4－11　家族の状況

	結婚の状況	同居家族数	子どもの有無	子どもの学歴期待
A教諭	既婚	1	いない	大学(上級修士号/博士課程)､Sami University College(ノルウェー)
B教諭	既婚	2	いる	大学(修士課程)
C教諭	離死別	3	いる	大学(上級修士号/博士課程)､専門大学(職業修士課程)､Sami University College(ノルウェー)
D教諭	既婚	4	いる	大学(上級修士号/博士課程)
E教諭	既婚	5	いる	大学(修士課程)

第3項　基礎学校での教育のあり方と意識

本項では、基礎学校での教育スタイルと、基礎学校や保護者に対する考え方を中心に見ていく。表4－12は所有免許、教員になった年、イナリ基礎学校に勤務し始めた年、勤務時間、担当教科、担当学年をまとめたものである。B教諭、C教諭、E教諭はフィンランドで教育免許を取得している。A教諭はその他となっており、詳細は調査票に記載されていないものの、サーミ大学で教員免許を取得したものと考えられる。教員としてのキャリアはB教諭が最も長く、1977年からである。現在の学校に勤務し始めた年を見ると、E教諭が2005年と最も古い。ただし、E教諭への聞き取りによると2005年は初めてイナリに就任した年と考えられる。E教諭は教員としてイナリやイヴァ

ロの基礎学校を経験した後、2014年8月にイナリ基礎学校の校長に就任したという。続いてC教諭が途中中断を挟むものの2001年から、B教諭が2008年から、D教諭が2013年から、A教諭が2014年からとなっている。勤務時間はおおむね8時半頃から15時頃までである。担当教科はA教諭が数学と体育、社会、環境、C教諭がイナリ・サーミ語である。

教員となった理由は、「これまでのキャリアが生かせるから」を選んだのがB教諭とD教諭、E教諭で最も多い。また、C教諭も言葉を理由にあげていることから、イナリ・サーミ語が話せるという特性を生かせる職場として学校教員を選んだものと考えられる。A教諭は「教育に携わりたかったから」、D教諭はキャリアの点とあわせて「金銭的に魅力があったから」、E教諭はキャリアの点のほかに「教育方針が気に入ったから」をあげている。選択肢としてあげていた「サーミ文化に関われるから」「サーミのために働けるから」を選んだ者はいなかった。

世帯年収はC教諭が20,000～39,999ユーロ、B教諭が40,000～69,999ユーロ、A教諭が70,000ユーロ前後、E教諭が70,000～89,999ユーロと開きがある。なお、OECDによると、フィンランドにおける小学校教員の平均年収は初任給で30,587ドル（約28,000ユーロ）、15年目で37,886ドル（約38,000ユーロ）となっている。

表4－12　教員としての勤務のあり方

	所有免許・資格	教師になった年	現在の学校に勤務し始めた年	勤務時間	担当教科	主に関わっている学年
A教諭	その他	2012	2014	8.30-15.00	数学、体育、社会、環境	1～4年生、7～9年生
B教諭	フィンランドの教育免許	1977	2008	8.45-13.50	就学前教育、1年生	就学前、1年生、7～9年生
C教諭	フィンランドの教育免許	―	2001-2005, 2012-	8.30-15.00	イナリ・サーミ語	就学前、1～2年生
D教諭	NA	1998	2013	8.45-13.50	初等教育	2年生
E教諭	フィンランドの教育免許	2002	2005	7.00-16.00	校長	すべて

表4－13　教員を選んだ理由、収入

	今の仕事に就いた理由	世帯年収
A教諭	教育に携わりたかったから	70,000€前後
B教諭	これまでのキャリアが生かせるから	40,000～69,999€
C教諭	その他（言葉の理由）	20,000～39,999€
D教諭	金銭的に魅力があったから、これまでのキャリアが生かせるから	NA
E教諭	これまでのキャリアが生かせるから、教育方針が気に入ったから	70,000～89,999€

教員自身のサーミ語能力を見ると、A教諭とB教諭が北サーミ語を、C教諭がイナリ・サーミ語を使うことができる。とくにB教諭は自身がサーミではなく、家族にもサーミ語を使う人がいないにもかかわらず、簡単な内容ならばという限定付きではあるものの、話すこと、読むこと、聞くこと、書くことそれぞれをできるようになっている。A教諭とC教諭は、話すこと、読むこと、聞くこと、書くことそれぞれにおいて高いサーミ語能力を持っている。表4－15にもあるように、A教諭は家庭ではフィンランド語中心であるが、C教諭は家庭でもサーミ語を中心とした会話をしている。また、A教諭とC教諭は授業以外の場でも、児童とはサーミ語を中心に使用している。

サーミ語が使えないというD教諭も、サーミ語を習いたいと回答しており、基礎学校の教諭たちのサーミ語に対する高い関心がうかがえる。

表４－14　サーミ語能力

	自分が使えるサーミ語	もっとも得意なサーミ語の能力			
		話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと
A 教諭	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける
B 教諭	北サーミ語	簡単な内容なら話せる	簡単な雑誌が読める	日常生活の話題がわかる	簡単なメモが書ける
C 教諭	イナリ･サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける
D 教諭	サーミ語は使えない	―	―	―	―
E 教諭	NA	―	―	―	―

表４－15　場面別の使用言語

	家族と会話するときの言語	授業で使用する言語	授業以外で児童と接するときの言語	サーミ語を習いたいか
A 教諭	フィンランド語と少しのサーミ語	サーミ語とフィンランド語を半々	サーミ語、フィンランド語	わからない
B 教諭	フィンランド語	フィンランド語	NA	すでに習っている
C 教諭	サーミ語	サーミ語	サーミ語	NA
D 教諭	NA	フィンランド語	フィンランド語	習いたい
E 教諭	NA	フィンランド語	フィンランド語	NA

本節の冒頭でもふれたように、イナリ基礎学校はあくまでも公立の基礎学校であり、サーミでない者の方が多い。そうであっても、イナリ基礎学校に関する教員の考え方を見ると、表４－16にあるようにサーミ語を学ぶこと、サーミ文化を学ぶことの意義を高く評価していることがうかがえる。「サーミ語を身につけられる」「サーミ文化を身につけられる」に対しては、いずれの教員も「そう思う」「ややそう思う」と答えている。また、自身がサーミである A 教諭、C 教諭だけでなく、他の教員も含めて、「サーミ語の授業を増やすべき」「サーミ文化の授業を増やすべき」にも「そう思う」「ややそう思う」と回答している。

校長という管理職の立場が影響しているのか、E 教諭は「サーミの友だちができる」や「サーミ文化の授業を増やすべき」、「もっと公的財政支援を増やすべき」に対してひとり「そう思わない」「あまりそう思わない」と答えるなど、他の教員と意見を異にすることがある。しかし、それ以外の教員については、驚くほど意見が共通している。

また、「教育設備が整っている」に対してはすべての教員が肯定的な評価を下している反面、スウェーデンやノルウェーの調査でも指摘されているように、サーミ語の教材に関してはすべての教員が整っていないと評価している。

表４－16　イナリ基礎学校に関する評価

	A.サーミ語を身につけられる	B.サーミ語で学ぶので理解しやすい	C.サーミ文化を身につけられる	D.サーミの友だちができる	E.サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる	F.フィンランド語が覚えられない	G.フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない
A 教諭	ややそう思う	そう思う	そう思う	そう思う	あまりそう思わない	そう思わない	あまりそう思わない
B 教諭	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
C 教諭	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う	そう思わない	あまりそう思わない
D 教諭	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
E 教諭	そう思う	無回答	そう思う	そう思わない	ややそう思う	そう思わない	そう思わない

	H.教育設備が整っている	I.サーミ語の教材が整っている	J.進学に有利だ	K.就職に有利だ	L.もっと公的財政支援を増やすべき	M.サーミ語の授業を増やすべき	N.サーミ文化の授業を増やすべき
A 教諭	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う
B 教諭	そう思う	あまりそう思わない	そう思う	ややそう思う	そう思う	そう思う	そう思う
C 教諭	そう思う	そう思わない	そう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う	ややそう思う
D 教諭	ややそう思う	そう思わない	そう思う	ややそう思う	そう思う	ややそう思う	そう思う
E 教諭	そう思う	あまりそう思わない	そう思う	そう思う	あまりそう思わない	ややそう思う	あまりそう思わない

基礎学校でありながらサーミ語、サーミ文化を学ぶということに関しては教員たちにほぼ受け入れられており、表４－17にあるように、「もっとサーミ文化の勉強をさせるべきだ」に対してはＥ教諭以外の４教諭が同意しているのに対し、「もっとフィンランド語の勉強をさせるべきだ」と考える者はひとりもいなかった。また、「もっと英語の勉強をさせるべきだ」と考えている教員もひとりもいない。日本に限らず、多くの国において先住民族の言語を学校教育で教える際に問題となる、先住民族の言語よりも、英語やドイツ語、フランス語などを学んだほうがよいという議論は、この学校においては無縁である。

一方で、学校としての形態は現在のままでよいと考えている者がほとんどであり、「サーミが多いのでサーミ学校とすべきだ」と答えたのはＢ教諭ひとりであった。

これまで見てきたように、教員たちは様々な意見は持ちつつも、サーミ語やサーミ文化を尊重しているイナリ基礎学校についてはおおむね高く評価していると考えられる。表４－18に示したように、様々な項目への満足度を尋ねても、Ｃ教諭が収入に対し「不満」と回答しているほかは、仕事内容、地域の環境、生活全般すべてにおいて、全員が「満足」「どちらかといえば満足」と答えているのである。

表４－17　イナリ基礎学校への要望（複数回答）

	もっとサーミ語の勉強をさせるべきだ	もっとサーミ文化の勉強をさせるべきだ	基礎学力をもっと身につけさせるべきだ	もっとフィンランド語の勉強をさせるべきだ	もっと英語の勉強をさせるべきだ	もっとカリキュラムに余裕がほしい	特に考えはない	学校の今後のあり方
Ａ教諭	×	○	○	×	×	×	×	普通の公立学校であるほうがよい
Ｂ教諭	○	○	○	×	×	×	×	サーミが多いのでサーミ学校とすべきだ
Ｃ教諭	○	○	×	×	×	×	×	普通の公立学校であるほうがよい
Ｄ教諭	×	○	×	×	×	×	×	普通の公立学校であるほうがよい
Ｅ教諭	○	×	○	×	×	×	×	普通の公立学校であるほうがよい

表４－18　生活満足度

	A. 仕事内容	B. 収入	C. 地域の環境	D.生活全般
Ａ教諭	満足	満足	満足	満足
Ｂ教諭	満足	満足	満足	満足
Ｃ教諭	満足	不満	満足	どちらかといえば満足
Ｄ教諭	満足	どちらかといえば満足	満足	満足
Ｅ教諭	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	満足	どちらかといえば満足

第４項　保護者とのかかわり

保護者からの相談は、Ａ教諭が「まったくない」と答えているほかは、全員が「たまにある」ないし「よくある」と回答している。相談内容としては「家庭での学習指導」と「学校の教育内容」についてがほとんどであり、校長であるＥ教諭は「子どもへの接し方」「教師の子どもへの接し方」「子どもの進路」とすべてのタイプの相談を受けている。

また、全員が保護者に対し何らかの要望を持っている。Ａ教諭とＢ教諭は、こちらがあげたすべての項目に対して、「少しそう思う」「とてもそう思う」と回答している。教員によって意見が割れているのは「子どもの教育に関して話しあう機会がほしい」であり、Ａ教諭、Ｂ教諭が肯定的、Ｃ教諭、Ｄ教諭、Ｅ教諭が否定的な見解を持っている。また、「学校の行事にもっと参加してほしい」

はＥ教諭だけが、「子どもを学校に任せきりにしないでほしい」と「保護者同士がもっと互いに関わり合ってほしい」についてはＤ教諭だけが否定的な見解を持っている。

表４－19　保護者から受ける相談

	相談を受けること	相談の内容（複数回答）					
		1. 子どもへの接し方について	2. 家庭での学習指導について	3. 学校の教育内容について	4. 教師の子どもへの接し方について	5. 子どもの進路について	6. その他
A教諭	まったくない	－	－	－	－	－	－
B教諭	たまにある	×	○	○	×	×	×
C教諭	たまにある	×	○	○	×	×	×
D教諭	たまにある	×	○	○	×	×	×
E教諭	よくある	○	○	○	○	○	×

表４－20　保護者への要望

	A. 子どもの教育に関して話しあう機会がほしい	B. 学校の行事にもっと参加してほしい	C. 家庭学習にもっと真剣に取り組んでほしい	D. 子どもを学校に任せきりにしないでほしい	E. 保護者同士がもっと互いに関わり合ってほしい
A教諭	少しそう思う	少しそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う	少しそう思う
B教諭	とてもそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う
C教諭	あまりそう思わない	少しそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う	とてもそう思う
D教諭	あまりそう思わない	とてもそう思う	少しそう思う	あまりそう思わない	あまりそう思わない
E教諭	あまりそう思わない	あまりそう思わない	NA	NA	少しそう思う

第５項　基礎学校教員の持つ将来像

教員調査の結果に関して、最後にサーミ社会や生徒たちの将来について、どのような考え方を持っているのかを確認する。

子どもたちに、将来どのように生活してほしいかを問うと、Ｂ教諭、Ｄ教諭、Ｅ教諭は「サーミとして積極的に生活してほしい」、Ａ教諭は「とくに民族は意識せず生活してほしい」と回答している。ここで興味深いのは、サーミであるＡ教諭が「民族を意識せずに」と回答し、サーミではない３人が「サーミとして積極的に」と回答している点であろう。一方で、自らの将来に関しては、サーミであるＣ教諭は「サーミとして積極的に生活していきたい」と答えているが、同じくサーミであるＡ教諭を始めとしてＢ教諭、Ｄ教諭は「とくに民族は意識せず生活したい」と回答している。フィンランド社会におけるマジョリティであるＢ教諭とＤ教諭には、マイノリティであるサーミへの特別な思いが表れているのであろうか。

表４－22では政府のサーミ政策に関する意識をまとめている。全員が重視しているのは「サーミ語、サーミ文化を守るべき」や「サーミに関する正しい理解を促進するべき」「サーミへの差別が起こらない社会をつくるべき」などである。一方で、「サーミの土地･資源に対する補償をすべき」や「サーミ議会の権限を拡大すべき」は、重要ではないと考える教員が多かった。Ｄ教諭やＥ教諭は、土地・資源の補償のほか、「サーミに対して雇用政策を拡充すべき」や「サーミへの教育支援を拡充すべき」「サーミに対する経済的援助を拡充すべき」などに対しても重要ではないという考え方を持っている。これは、サーミへの特別な権利付与や直接的援助は避けるべきであるという意識の表れであると考えられる。マイノリティの権利補償が、マジョリティへの逆差別へとつながり、国民意識の分断や対立を生み出す危険性については多くの指摘がされている。Ｄ教諭やＥ教諭の意

識は、このような対立を生じさせないためのものといえる。

表４－21　将来期待

	生徒たちの将来期待	自らの将来期待
A教諭	特に民族は意識せず生活してほしい	特に民族は意識せず生活したい
B教諭	サーミとして積極的に生活してほしい	特に民族は意識せず生活したい
C教諭	その他（幸せになってほしい）	サーミとして積極的に生活していきたい
D教諭	サーミとして積極的に生活してほしい	特に民族は意識せず生活したい
E教諭	サーミとして積極的に生活してほしい	NA

表４－22　フィンランド政府のサーミ政策について

	A. サーミへの差別が起こらない社会をつくるべき	B. サーミ語、サーミ文化を守るべき	C. サーミに対して雇用政策を拡充すべき	D. サーミへの教育支援を拡充すべき	E. サーミに対する経済的援助を拡充すべき	F. サーミの土地・資源に対する補償をすべき
A教諭	ある程度重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	あまり重要でない
B教諭	とても重要	とても重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	まったく重要でない
C教諭	とても重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	あまり重要でない	ある程度重要
D教諭	とても重要	とても重要	まったく重要でない	まったく重要でない	まったく重要でない	あまり重要でない
E教諭	とても重要	とても重要	ある程度重要	まったく重要でない	まったく重要でない	まったく重要でない

	G. サーミに関する正しい理解を促進すべき	H. サーミ議会の権限を拡大すべき	I. 国会のラッピ県の議席数を増やすべき	J. 国家予算のうちサーミ関連予算を増やすべき	K. サーミのみを対象とする特別の施策はおこなうべきではない
A教諭	とても重要	あまり重要でない	ある程度重要	ある程度重要	あまり重要でない
B教諭	とても重要	とても重要	とても重要	ある程度重要	まったく重要でない
C教諭	とても重要	あまり重要でない	とても重要	とても重要	あまり重要でない
D教諭	とても重要	まったく重要でない	とても重要	ある程度重要	とても重要
E教諭	とても重要	まったく重要でない	まったく重要でない	まったく重要でない	ある程度重要

第６項　小括

教員調査から得られた知見は以下のとおりである。

第１に、イナリ基礎学校はサーミ学校ではなく、サーミ以外の児童・生徒が多数派であるにもかかわらず、サーミ語やサーミ文化を学ぶことに関しては全教員が高く評価をしていた。サーミ語やサーミ文化を学ぶことが進学や就職に負の影響を与えるという考え方も、フィンランドの基礎学校なのだからマジョリティであるフィンランド語やフィンランド文化を学ぶべきだという考え方も見られない。そしてこの見解に、教員自身がサーミであるか否かは関係がなかった。むしろ、サーミ学校とすべきだという意見や、児童生徒たちにサーミとして積極的に生活してほしいという考え方は、サーミではない教員にこそ見られた。

第２に、先行研究においても指摘されていたサーミ語教材の不足については、全教員が課題としてあげている。教材の不足をサーミ語担当教員の努力で補うという構図はフィンランドにおいても見られた。

第３に、教師のサーミ語能力という点では、授業以外でも子どもとサーミ語で話をする教員がいる一方で、サーミ語が使えない者もいた。ただ、サーミ語が使えない教員も、サーミ語学習には意欲を見せている。

先行研究で見られた、北サーミ語への偏りの問題については、イナリ基礎学校ではほとんど問題とはならない。そもそもイナリ・サーミが多い地域でもあるし、母語としてイナリ・サーミ語を選

択している者も、学年によっては北サーミ語選択者より多いくらいである。スコルト・サーミ語に関する課題は残しつつも、サーミの中のマジョリティである北サーミ語話者に偏ることなく、ケアができている。

各サーミ語担当者や非サーミの教員が、その多様性を持ちつつも共通してサーミ文化への強い思い入れを持っている点が、イナリ基礎学校の特色であるといえる。

第６節　保護者の意識

第１項　課題の設定

保護者調査における重大な関心は、サーミ語やサーミ文化というマイノリティの言語・文化を学校で学ぶことを、保護者がどのように評価しているのかということである。わが国において先住民であるアイヌの民族教育について語られる場合、アイヌの人々からも懸念の声としてあがるのが、アイヌ語やアイヌ文化を学ぶことにどのようなメリットがあるのか、受験や就職を考えた場合に不利になるのではないかといったことである。アイヌ語を学ぶくらいなら英語を学んだほうがよいという意見も根強い。

過去に行ったスウェーデンのサーミ学校保護者調査では、保護者がサーミ語やサーミ文化に対して非常に積極的で強い思いを抱いていることが明らかになった。それらを学ぶことで将来への不安が増えるということも一切ない（野崎 2013：126）。これは、基礎学校とサーミ学校とを選択できる状況の中で、自らサーミ学校を選択した保護者の意識であるという点においては、当然であるともいえよう。

ノルウェーの基礎学校調査でも、保護者たちは学校でサーミ語・サーミ文化を学ぶことを高く評価していた。将来についてはサーミとしての教育に執着しているわけではなく、幅広い教育の可能性を考えている。しかしそれでも、マイノリティの言語、文化を学ぶことを無駄であるとはまったく考えていなかった（品川 2015：36）。ただし、ノルウェー調査の対象校は、基礎学校ではあっても児童のほとんどはサーミであり、事実上のサーミ学校となっている。

これらの先行研究に対し、本調査はサーミ学校がなく、またノルウェーのように児童のほぼ全員がサーミであるということもない。このような、学校内でもサーミがマイノリティ側となっている状況において、保護者たちはサーミ語、サーミ文化教育にどのような意識を持っているのであろうか。本節ではこの点を中心に、保護者の基礎学校に対する意識や、サーミ文化、サーミ教育への思いを検討していく。

第２項　回答者の属性

11 人の回答者は全員が児童、生徒の母親である。年齢は 30 代が４人、40 代が６人、50 代が１人であり、平均年齢は 42.8 歳である。Ｆから Ｊまでの５人はサーミであり、イナリ出身が３人、ウツヨキ出身が２人である。また、ＧとＩの２人はトナカイ飼育を職業としている。

ＫからＰまでの６人はサーミではない。出身はラッピ県と答えたＫ以外はいずれもフィンランド南部や東部である。Ｐ以外はイナリにあるサーミ教育専門学校（Sami Education Institute）に通った経験を持っている。

職業は公務員が多く、F、J、K、L、M、N の６人である。Ｈは自営業、Ｐは料理人、Ｏは無職であった。

世帯年収は20,000～39,999ユーロがG、N、Oの３人、40,000～69,999ユーロがH、L、Pの３人、70,000～89,999ユーロがI、K、Mの３人である。それぞれの選択肢の中央値を代表値として計算した平均世帯年収は55,000ユーロとなる。

サーミのシンボルでもあるトナカイ飼育は、スウェーデン、ノルウェーにおいてはサーミの独占となっているものの、フィンランドにおいてはサーミ以外にも開かれている。トナカイを飼っている、または飼っていたのは、サーミではHを除く４人、サーミ以外ではL、Oの２人である。現在所有している４人を見ると、Fはトナカイ業が「家計の足しにはならない」と答えているのに対し、GとI、Oは「家計のほとんどを占める」と回答しており、重要な収入源となっていることがわかる。

表４－23　保護者の属性

	関係	年齢	子どもの学年	あなたはサーミですか	出身地	学歴	SEI経験	職業	収入
F	母	30代	6年生	サーミ	ウツヨキ	SEI、SEI以外の職業学校	○	公務員	NA
G	母	40代	7年生、8年生	サーミ	イナリ	専門大学（職業学士課程）	×	トナカイ飼育	20,000～39,999€
H	母	40代	4年生、8年生	サーミ	イナリ	大学（修士課程）	×	自営業	40,000～69,999€
I	母	30代	3年生、5年生	サーミ	イナリ	専門大学（職業学士課程）	○	トナカイ飼育、食肉加工	70,000～89,999€
J	母	50代	8年生	サーミ	ウツヨキ	普通高校、ビジネス学校	×	公務員	NA
K	母	30代	5年生	サーミではない	ラッピ県	大学（修士課程）	○	公務員	70,000～89,999€
L	母	40代	4年生	サーミではない	イーサルミ（東スオミ州北サヴォ県）	SEI、SEI以外の職業学校	○	公務員	40,000～69,999€
M	母	40代	就学前、2年生	サーミではない	ピエクサマキ（東スオミ州南サヴォ県）	大学（修士課程）、専門大学（職業修士課程）	○	公務員	70,000～89,999€
N	母	30代	1年生、6年生	サーミではない	マンッタ（西スオミ州ピルカンマー県）	大学（修士課程）	○	公務員	20,000～39,999€
O	母	40代	1年生、4年生	サーミではない	ヘルシンキ	SEI、SEI以外の職業学校	○	無職	20,000～39,999€
P	母	40代	2年生、4年生	サーミではない	キテー（東スオミ州北カルヤラ県）	専門大学（職業修士課程）	×	料理人、観光	40,000～69,999€

注）SEIはサーミ教育専門学校（Sami Education Institute）のこと。

表４－24　トナカイ飼育

	家族のトナカイ飼育	自身のトナカイ所有	トナカイ収入
F	現在飼っている	所有している	家計の足しにはならない
G	現在飼っている	所有している	家計のほとんどを占める
H	飼っていない	所有していない	－
I	かつて飼っていた	所有している	家計のほとんどを占める
J	かつて飼っていた	所有していない	－
K	飼っていない	所有していない	－
L	かつて飼っていた	所有していない	－
M	飼っていない	所有していない	－
N	飼っていない	所有していない	－
O	現在飼っている	所有している	家計のほとんどを占める
P	飼っていない	所有していない	－

回答者のうち、６人は自身がサーミではないと答えているが、無回答の２人を除く全員がサーミ語を使うことができる。サーミ語を使える９人は、いずれも北サーミ語を使用することができ、またサーミであるH、I、サーミではないL、M、Nの５人はイナリ・サーミ語も使えると回答している。読むことについては多くがかなり高いサーミ語能力を有しているが、聞くこと、話すこと、書くことについては、得意とはいえない者も多くなっている。

家族との会話で用いている言語を見てみると、サーミとサーミでない者とで差が生じている。サーミの５人では、３人が「サーミ語とフィンランド語を半々」、２人が「フィンランド語と少しのサーミ語」と答えているように、多少なりとも家庭でもサーミ語を使用している。サーミではない４人を見ると、１人が「半々」、１人が「サーミ語と少しのフィンランド語」であり、残りの２人はサーミ語を家庭では使用していない。ただし、サーミの人々といえどもやはりサーミ語は自然と身につくものではないようであり、F、H、Iはサーミ語を現在習っているし、Gも「習いたい」と回答している。

家族のサーミ語使用状況をまとめたのが表４－26である。サーミでは、FとGが親、祖父母世代からサーミ語を使用しているのに対し、HやJは子ども世代としか答えていない。上の代よりも、自分自身以降の世代でサーミ語が復興してきたということを示している。Iは、サーミ語を話せる家族はいないということであった。

サーミではないKからPを見ると、配偶者や配偶者の家族がサーミ語を話すという者が多い。結婚を機に、サーミ語を習うようになったのかもしれない。

表４－25　サーミ語の能力

	自分が使えるサーミ語	もっとも得意なサーミ語の能力				家族と話す言語	サーミ語学習意思
		話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと		
F	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける	サーミ語とフィンランド語を半々	すでに習っている
G	北サーミ語	簡単な内容なら話せる	本が読める	日常生活の話題がわかる	簡単なメモが書ける	フィンランド語と少しのサーミ語	習いたい
H	北サーミ語、イナリ・サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	簡単なメモが書ける	フィンランド語と少しのサーミ語	すでに習っている
I	北サーミ語、イナリ・サーミ語	かなり話せる	本が読める	日常生活の話題がわかる	簡単なメモが書ける	サーミ語とフィンランド語を半々	すでに習っている
J	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける	サーミ語とフィンランド語を半々	NA
K	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
L	北サーミ語、イナリ・サーミ語	ほとんど話せない	簡単な雑誌が読める	簡単なことならわかる	簡単なメモが書ける	フィンランド語	すでに習っている
M	北サーミ語、イナリ・サーミ語	かなり話せる	本が読める	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける	サーミ語とフィンランド語を半々	習いたい
N	北サーミ語、イナリ・サーミ語	流暢に話せる	NA	議会のやり取りなどがわかる	どんな文書でも書ける	サーミ語と少しのフィンランド語	すでに習っている
O	北サーミ語	簡単な内容なら話せる	本が読める	簡単なことならわかる	簡単なメモが書ける	フィンランド語	習いたい
P	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA

表４－26　家族のサーミ語使用

	北サーミ語が話せる家族	イナリ・サーミ語が話せる家族	その他のサーミ語が話せる家族
F	実母、実父、母方祖母、母方祖父、父方祖母、父方祖父	－	－
G	実父、母方祖母、母方祖父、父方祖母、父方祖父、配偶者、配偶者の母、配偶者の父	－	－
H	－	その他（子どもたち）	－
I	いない	いない	いない
J	その他（息子）	－	－
K	－	－	－
L	－	－	父方祖母（方言は不明）
M	配偶者の父	配偶者の父、その他（子どもたち）	－
N	父方祖母、配偶者	父方祖母、配偶者	その他（子どもたち）（方言は不明）
O	配偶者、配偶者の父	－	－
P	いない	いない	いない

第３項　基礎学校とサーミ語 / 文化教育に対する評価と意識

保護者たちの基礎学校に対する意識を表４－27にまとめている。

「サーミ語を身につけられる」「サーミ文化を身につけられる」に対しては、Ｆが「ややそう思う」と回答している以外、全員が「そう思う」と答えている。また、「サーミの友だちができる」に対しては全員が肯定的な回答をしているのに対し、「サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる」と考える者はＨひとりである。「フィンランド語が覚えられない」「フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない」に関しても、全員が「そう思わない」と回答しており、基礎学校でサーミ語やサーミ文化を学ぶことに関しては、ほぼ異論はでていないことがわかる。

また、進学、就職に関しても、「進学に有利だ」に対してはＧとＯ、「就職に有利だ」に対しては無回答を除いてＯ以外の全員が肯定的な評価をしている。

サーミ語の授業を増やすべきだと考えるのはＧ、Ｋ、Ｐを除く７人、サーミ文化の授業を増やすべきだと考えるのはＫ、Ｐを除く８人であった。

サーミ語教育、サーミ文化教育に関する大きな課題のひとつである「サーミ語の教材」については、ＫとＯを除く全員が不足を感じている。一方で基礎学校の教育設備自体にはおおむね満足しているようである。

表４－27　基礎学校に対する意識

	A. サーミ語を身につけられる	B. サーミ語で学ぶので理解しやすい	C. サーミ文化を身につけられる	D. サーミの友だちができる	E. サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる	F. フィンランド語が覚えられない	G. フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない
F	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
G	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	あまりそう思わない	そう思わない	そう思わない
H	そう思う	ややそう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う	そう思わない	そう思わない
I	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
J	そう思う	NA	そう思う	ややそう思う	NA	そう思わない	NA
K	そう思う	そう思う	NA	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
L	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
M	そう思う	ややそう思う	そう思う	ややそう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
N	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	あまりそう思わない	そう思わない	そう思わない
O	そう思う	あまりそう思わない	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
P	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	あまりそう思わない	そう思わない	そう思わない

	H. 教育設備が整っている	I. サーミ語の教材が整っている	J. 進学に有利だ	K. 就職に有利だ	L. もっと公的財政支援を増やすべき	M. サーミ語の授業を増やすべき	N. サーミ文化の授業を増やすべき
F	ややそう思う	あまりそう思わない	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う
G	そう思う	そう思わない	そう思う	あまりそう思わない	そう思う	そう思わない	ややそう思う
H	ややそう思う	そう思わない	ややそう思う	ややそう思う	そう思う	そう思う	そう思う
I	そう思う	あまりそう思わない	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う
J	ややそう思う	あまりそう思わない	ややそう思う	NA	NA	NA	NA
K	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	あまりそう思わない
L	あまりそう思わない	そう思わない	そう思う	ややそう思う	そう思う	そう思う	そう思う
M	ややそう思う	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う	ややそう思う
N	そう思う	あまりそう思わない	ややそう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う	ややそう思う
O	そう思う	ややそう思う	そう思わない	そう思わない	そう思う	ややそう思う	ややそう思う
P	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思う	ややそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	あまりそう思わない

サーミ語で、もしくはサーミ語を学ぶことについてもう少し掘り下げてみると、表４－28にあるように、スウェーデン調査やノルウェー調査で指摘されている理系科目についても、O以外はサーミ語で学んでもとくに問題はないと感じているようである。また、サーミのホームランド以外の地域への進学についてもGを除く全員が、就職にいたってはGを含め全員が何ら不安を感じていない。学校への要望を見てみると、「もっとサーミ文化の勉強をしてほしい」と答えた者が７人いる。また、「基礎学力をもっと身につけさせてほしい」と答えた者も６人いるが、そのうちの４人は同時にサーミ文化の勉強をすることも求めていることから、サーミ文化の学習が基礎学力を身につける際の障壁になっているとは考えていないようだ。「もっとフィンランド語の勉強をしてほしい」という者はひとりもおらず、「もっと英語の勉強をしてほしい」という者も２人しかいなかった。しかも、この２人は同時に「もっとサーミ語の勉強をしてほしい」とも回答しているため、わが国で問題となるように、「先住民族の言語を学ぶくらいならその分英語を」という考え方でもないことがわかるのである。

フィンランドにはサーミ学校という制度自体が存在せず、イナリ基礎学校も一般の公立学校である。そのような設置形態について、今後の展望を聞くと、サーミであるG、H、Iの３人は「サーミ学校とすべきだ」と回答している。同じくサーミであるFは「普通の公立学校であるほうがよい」、Jは「どちらともいえない」と回答している。一方、サーミでない保護者を見ると、KとN、Pの３人はこのまま「普通の公立学校であるほうがよい」と回答し、残りの３は「どちらともいえない」であった。教員調査と異なり、サーミ学校化を望むサーミ保護者と現状維持を望む非サーミ保護者という対比が現れている。

ここまで見たように、イナリ基礎学校においてサーミ語やサーミ文化に関する授業が設定されていることに関しては、ほぼ一致した見解として肯定されている。それらの学習が進学、就職に悪影響を及ぼすことはまったく想定されておらず、むしろこれまで以上にそのような機会を設けるべきであるという意見が強かった。学校の形態については意見が割れたものの、それ以外についてはサーミとサーミでない人々との違いもほとんどなく、結果として、イナリ基礎学校に対しては全員が「どちらかといえば満足している」ないし「大変満足している」と回答している。

表４－28　サーミ語で/を学ぶことについて、学校への要望（複数回答）

	サーミ語で学ぶこと、サーミ語を学ぶことについて				学校への要望（複数回答）								
	A.理系科目の学習はサーミ語よりもフィンランド語の方がよい	B. サーミホームランド以外の地域へ進学する際には不利になる	C. サーミホームランド以外の地域で就職する際には不利になる	D. サーミホームランド以外の地域で生活する際には不利になる	もっとサーミ語の勉強をしてほしい	もっとサーミ文化の勉強をしてほしい	基礎学力をもっと身につけさせてほしい	もっとフィンランド語の勉強をしてほしい	もっと英語の勉強をしてほしい	もっとカリキュラムに余裕がほしい	先生にもっと熱心にしてほしい	特に要望はない	その他
F	そう思わない	そう思わない	そう思わない	そう思わない	×	×	×	×	×	×	×	○	×
G	そう思わない	ややそう思う	そう思わない	そう思わない	×	○	×	×	×	×	×	×	○
H	あまりそう思わない	あまりそう思わない	そう思わない	そう思わない	×	○	×	×	×	○	×	×	×
I	そう思わない	そう思わない	そう思わない	そう思わない	○	○	○	×	○	○	×	×	×
J	あまりそう思わない	そう思わない	そう思わない	そう思わない	×	×	○	×	×	○	×	×	×
K	あまりそう思わない	そう思わない	そう思わない	そう思わない	×	×	×	×	×	×	×	×	○
L	あまりそう思わない	あまりそう思わない	そう思わない	そう思わない	○	○	○	×	○	×	○	×	×
M	そう思わない	そう思わない	そう思わない	そう思わない	×	○	○	×	×	×	×	×	○
N	そう思わない	そう思わない	そう思わない	そう思わない	○	○	×	×	×	×	×	×	×
O	ややそう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない	×	×	○	×	×	×	○	×	×
P	あまりそう思わない	あまりそう思わない	あまりそう思わない	あまりそう思わない	×	○	○	×	×	×	×	×	×

表４－29　基礎学校の今後、基礎学校への満足度

	公立学校であることについて	学校への満足度
F	普通の公立学校であるほうがよい	どちらかといえば満足している
G	サーミが多いのでサーミ学校とすべきだ	どちらかといえば満足している
H	サーミが多いのでサーミ学校とすべきだ	どちらかといえば満足している
I	サーミが多いのでサーミ学校とすべきだ	どちらかといえば満足している
J	どちらともいえない	どちらかといえば満足している
K	普通の公立学校であるほうがよい	大変満足している
L	どちらともいえない	どちらかといえば満足している
M	どちらともいえない	どちらかといえば満足している
N	普通の公立学校であるほうがよい	どちらかといえば満足している
O	どちらともいえない	どちらかといえば満足している
P	普通の公立学校であるほうがよい	どちらかといえば満足している

第４項　子どもの進路に関する意識

北欧全般の傾向として、子どもたちへの学歴期待はとても高い。多くが大学の修士課程以上を子どもに望んでいる。また、専門大学よりは通常の大学を希望する者が多い。Ｉはノルウェーのサーミ大学も視野にいれている。

イナリ近辺には高等教育機関はなく、国内ならば最も近い場所であってもロヴァニエミのラップランド大学まで行かなければならない。そのため、子どもの進学を希望するということは子どもが一度イナリを離れることを意味する。この点について、保護者はあまり意識していないようであり、子どもに将来も「現在住んでいる所に住み続けてほしい」と願っている者はＦ、Ｈ、Ｏの３人だけであった。それ以外は、Ｐが「フィンランド国内にはいてほしい」と言っているほかは「どこに住んでもかまわない」と回答している。サーミ語やサーミ文化に対するこだわりは、決して子どもをサーミ地域に縛り付けようとするものではないようである。

表４－30　子どもの学歴期待と居住地期待

	学歴期待	居住地期待
F	大学（修士課程）	現在住んでいる所に住み続けてほしい
G	大学（上級修士号/博士課程）、専門大学（職業修士課程）	どこに住んでも構わない
H	大学（修士課程）、自分が行きたいところ	現在住んでいる所に住み続けてほしい
I	大学（上級修士号/博士課程）、専門大学（職業修士課程）、Sami University College（ノルウェー）	どこに住んでも構わない
J	NA	どこに住んでも構わない
K	大学（上級修士号/博士課程）	どこに住んでも構わない
L	大学（学士課程）	どこに住んでも構わない
M	本人が満足するまで	どこに住んでも構わない
N	大学（修士課程）、Sami University College（ノルウェー）	どこに住んでも構わない
O	大学（修士課程）	現在住んでいる所に住み続けてほしい
P	大学（修士課程）	フィンランド国内にはいてほしい

第５項　保護者のサーミ意識

続いて、保護者自身のサーミとしての意識形成について検討する。ここでは自らをサーミであると回答したＦ、Ｇ、Ｈ、Ｉ、Ｊに絞って見てみることにする。

サーミとしての意識は５人ともに非常に強く、全員が「つねに意識している」としている。どのような場面でサーミであることを意識するかを尋ねると、３人はあらゆる場面をあげていた。

また、全員が子どもの頃から家庭の中で伝統文化の体験をしている。伝統文化の例としては釣りやベリー採り、革細工などがあげられていた。

子どもの頃のサーミ以外の人々との関係では、F、G、Hの３人は「仲良くつきあっていた」と答えているが、Iは「いじめられた」と回答している。現在の人付き合いを聞くとG、H、Iの３人は人間関係の半分以上がサーミの人となっており、人口比などから考えると、サーミとの接点の多い生活を送っていると考えられる。また、G、H、Iは子育てをするようになってから「サーミであることを誇りに思うことが増えた」と回答している。

子どもが基礎学校へ入学する前から、保護者たちは子どもにサーミの文化を体験させる機会をつくっている。「サーミの言葉で話す」「サーミの絵本を読む」については全員が行っていた。Jを除いた４人は「サーミの昔話」「サーミの手工芸」「サーミの料理」も子どもに対して行っている。さらにこれらの行為は、表４－33にあるように「サーミの絵本を読む」ことをG、Jの両名がやめたほかは、子どもたちが基礎学校へ入学した現在においても変わらず行われ続けている。

表４－31　サーミとしての意識、意識する場面（複数回答）

	サーミとしての意識	家族でサーミのことを話題にするとき	家族でサーミの文化を実践するとき	家族以外のサーミの人々と関わるとき	サーミ以外の人々と関わるとき	サーミの文化や歴史に触れたとき	サーミ語に触れたとき	サーミの人々の身体的特徴に気づいたとき	サーミであることで差別を受けたとき	その他
F	つねに意識している	×	×	×	×	×	×	×	×	×
G	つねに意識している	○	○	○	○	○	○	○	○	×
H	つねに意識している	○	○	○	○	○	○	○	○	×
I	つねに意識している	○	○	○	○	○	○	○	○	いつも
J	つねに意識している	○	×	×	×	○	○	×	×	×

表４－32　サーミ文化体験、人付き合い、子育ての影響

	子どもの頃の、家族の中での伝統文化体験	子どもの頃の、サーミ以外の人との関わり	現在、人付き合い	サーミとしての自覚に対する子育ての影響
F	ある	仲良く付き合っていた	NA	特に変わらない
G	ある	仲良く付き合っていた	サーミの人々との付き合いが多い	サーミであることを誇りに思うことが増えた
H	ある	仲良く付き合っていた	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらい付き合っている	サーミであることを誇りに思うことが増えた
I	ある	いじめられた	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらい付き合っている	サーミであることを誇りに思うことが増えた
J	ある	NA	付き合ううえで、サーミかサーミでないかは意識していない	特に変わらない

表４－33　入学前の家庭でのサーミ文化体験（複数回答）

	入学前の家庭の文化経験	サーミの言葉で話す	サーミの絵本を読む	サーミの昔ばなし	サーミの手工芸	サーミの料理	トナカイの扱い方	その他
F	ある	○	○	○	○	○	○	×
G	ある	○	○	○	○	○	○	×
H	ある	○	○	○	○	○	×	×
I	ある	○	○	○	○	○	○	×
J	ある	○	○	×	×	×	×	×

表４－34　現在の家庭でのサーミ文化体験（複数回答）

	現在、家庭のサーミ文化	サーミの言葉で話す	サーミの絵本を読む	サーミの昔ばなし	サーミの手工芸	サーミの料理	トナカイの扱い方	その他
F	ある	○	○	○	○	○	○	×
G	ある	○	×	○	○	○	○	×
H	ある	○	○	○	○	○	×	×
I	ある	○	○	○	○	○	○	×
J	ある	○	×	×	×	×	×	×

表４－31ではG、H、Iの３名が、サーミとして意識する場面に「サーミであることで差別を受けたとき」をあげている。また、表４－32でもふれたように、Iは子どもの頃、サーミではない人々からいじめられたと回答している。このように、フィンランド国内でもサーミに対する差別は残っているようである。表４－35では、サーミ差別について尋ねた結果をまとめている。これによると、HとIは自らが差別を受けた経験を持っており、残りの３人も自分自身は経験していないものの、他の人が差別を受けたことを知っている。差別の中身としては、「親世代がサーミ語を話すことを許されなかったこと」「罵声を浴びせられる」などがあげられている。2015年にフィンランドで行った調査では、北サーミやイナリ・サーミに対する差別はあまり見られないという意見も聞かれたが、根強い問題として残っているようである。

サーミ議会には全員が登録している。また、教員調査では民族は意識せずに生活したいという者が多かったが、保護者では２人がそのように回答し、３人は「サーミとして積極的に生活していきたい」と答えている。

表４－35　差別経験、議会選挙登録、今後の生き方

	サーミ差別	サーミ議会選挙人名簿	今後の生き方
F	自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている	登録している	サーミとして積極的に生活していきたい
G	自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている	登録している	サーミとして積極的に生活していきたい
H	ある	登録している	サーミとして積極的に生活していきたい
I	ある	登録している	特に民族は意識せずに生活していきたい
J	自分に対してはないが、他の人が受けたことを知っている	登録している	特に民族は意識せずに生活していきたい

第６項　フィンランド社会やサーミ政策への意識

保護者の意識の最後に、社会観やサーミ政策への考え方を見ておこう。まず、フィンランド社会にある不公平についてである。日本では、フィンランドは男女平等をはじめとする人権先進国として紹介されることが多い[15)]。しかし、保護者たちは様々な場面での不公平を感じている。

たとえば性別による不公平では、３人が「よくある」、５人が「少しある」と回答している。「あまりない」「ない」と回答したのはそれぞれ１人ずつだけであった。学歴による不公平と職業による不公平は「ない」「あまりない」と回答した者がそれぞれ３人、２人である。所得・資産による不公平にいたっては、無回答の１人を除く全員が「よくある」「少しある」と答えている。そして、「人種・民族による不公平」も「あまりない」と答えたのはIだけであり、残りは「よくある」が４人、「少しある」が５人と、所得・資産によるものほどではないにせよ、存在すると考えられている。

このような考え方はサーミ政策への意識にも反映している。様々なサーミ政策についてどう考えるかを聞くと、「サーミへの差別が起こらない社会をつくるべき」にはFが「ある程度重要」と答え、それ以外の全員は「とても重要」と回答している。意見が全員一致しているのは他に「サーミ語、サーミ文化を守るべき」と「サーミに関する正しい理解を促進するべき」「サーミ関連予算を増やすべき」の３つである。その他のサーミ政策の考え方については意見が分かれるものもあり、たとえば雇用政策の拡充や教育支援の拡充についてはそれぞれ２人が「あまり重要ではない」と回答している。また、先住民族をめぐるきわめて大きな課題のひとつである「土地・資源に対する補償をすべき」に対しても、２人が「とても重要」、４人が「ある程度重要」と答えている一方で、「あまり重要でない」が２人、「まったく重要でない」も１人いた。

多くの政策が重要であると考えられている一方で、「サーミのみを対象とする特別の施策は行うべきではない」と考える者も多く、補償や振興を求める反面、特別視しすぎてしまうことへの危機感もうかがえた。

ただし、社会への不公平感やサーミ政策に対する様々な思惑はありつつも、保護者たちは基本的に現在の生活に満足している。仕事内容、収入、地域の環境、生活全般に関しての満足度を聞いたところ、収入に対してＬが「どちらかといえば不満」と回答したほかは、全員が「満足」あるいは「どちらかといえば満足」と回答している。

表４－36　社会の不公平

	A．性別による不公平	B．学歴による不公平	C．職業による不公平	D．所得・資産による不公平	E．家柄による不公平	F．人種・民族による不公平
F	NA	NA	NA	NA	NA	NA
G	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある
H	少しある	少しある	少しある	少しある	よくある	よくある
I	ない	ない	ない	少しある	あまりない	あまりない
J	少しある	あまりない	NA	よくある	少しある	少しある
K	あまりない	少しある	少しある	よくある	少しある	少しある
L	少しある	少しある	少しある	よくある	少しある	少しある
M	少しある	ない	ない	少しある	少しある	少しある
N	よくある	少しある	少しある	よくある	よくある	よくある
O	よくある	少しある	少しある	よくある	よくある	よくある
P	少しある	少しある	少しある	よくある	少しある	少しある

表４－37　サーミ政策について

	A．サーミへの差別が起こらない社会をつくるべき	B．サーミ語、サーミ文化を守るべき	C．サーミに対して雇用政策を拡充すべき	D．サーミへの教育支援を拡充すべき	E．サーミに対する経済的援助を拡充すべき	F．サーミの土地・資源に対する補償をすべき
F	ある程度重要	とても重要	NA	あまり重要でない	あまり重要でない	まったく重要でない
G	とても重要	とても重要	あまり重要でない	とても重要	ある程度重要	あまり重要でない
H	とても重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要
I	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	ある程度重要
J	とても重要	とても重要	NA	ある程度重要	NA	NA
K	とても重要	とても重要	あまり重要でない	あまり重要でない	あまり重要でない	ある程度重要
L	とても重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	NA	NA
M	とても重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	あまり重要でない	ある程度重要
N	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要
O	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要	とても重要
P	とても重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	あまり重要でない

	G．サーミに関する正しい理解を促進すべき	H．サーミ議会の権限を拡大すべき	I．国会のラッピ県の議席数を増やすべき	J．国家予算のうちサーミ関連予算を増やすべき	K．サーミのみを対象とする特別の施策はおこなうべきではない
F	とても重要	ある程度重要	まったく重要でない	ある程度重要	ある程度重要
G	とても重要	ある程度重要	まったく重要でない	ある程度重要	とても重要
H	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	とても重要	まったく重要でない
I	とても重要	とても重要	ある程度重要	とても重要	あまり重要でない
J	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	ある程度重要	NA
K	とても重要	ある程度重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要
L	とても重要	NA	ある程度重要	NA	とても重要
M	とても重要	あまり重要でない	とても重要	とても重要	ある程度重要
N	とても重要	ある程度重要	ある程度重要	とても重要	とても重要
O	とても重要	あまり重要でない	まったく重要でない	とても重要	まったく重要でない
P	とても重要	ある程度重要	とても重要	ある程度重要	ある程度重要

表４－38　満足度

	A．仕事内容	B．収入	C．地域の環境	D．生活全般
A	NA	NA	NA	NA
B	どちらかといえば満足	どちらかといえば不満	どちらかといえば満足	満足
C	満足	どちらかといえば満足	満足	満足
D	満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足
E	満足	満足	満足	どちらかといえば満足
F	満足	満足	満足	NA
G	どちらかといえば満足	どちらかといえば不満	満足	どちらかといえば満足
H	満足	どちらかといえば満足	満足	満足
I	満足	どちらかといえば満足	満足	満足
J	不満	不満	満足	満足
K	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	満足	どちらかといえば満足

第７項　小括

保護者調査から得られた知見は以下の通りまとめられる。

第１に、学校でサーミ語･サーミ文化を学ぶことについては、すべての保護者が評価をしている。また、フィンランド語やフィンランドの習慣・文化との隔絶が生まれてしまうことを危惧する保護者もまったくいない。この点はスウェーデン調査やノルウェー調査と同様である。ただし、先行研究がサーミのみ、あるいはサーミが圧倒的マジョリティである学校で行われたのに対し、本調査はサーミが少数派の学校である。その場合においても、また、保護者がサーミであるかどうかにも関係なく、このような結果になることは興味深い。進学、就職に不利になると考える者もほとんどおらず、むしろサーミ語やサーミ文化の学習をもっと増やすべきだという意見が強かった。

第２に、学校のあり方については、サーミの保護者とそうでない保護者との間で意見の相違が見られた。サーミ保護者はサーミ学校への移行を希望する者がいるのに対し、非サーミ保護者は公立学校のままを望む者が多かった。

第３に、子どもの進路に関しては、高学歴志向であった。また、サーミ語、サーミ文化の習得を強く望む者が多いが、それは決して子どもをサーミ地域に留めておこうとするものではなく、将来もイナリに住み続けてほしいと考える保護者は少数であった。

第４に、サーミでない保護者も、高いサーミ語能力を持っていた。ほとんどの保護者が北サーミ語を使え、イナリ・サーミ語を使う非サーミの保護者もいる。ただ、このような高いサーミ語能力は、サーミの家庭においても、親世代から家庭で受け継いだものとはなかなかいえないようである。家族との会話はフィンランド語のウェイトが高く、また、サーミであってもサーミ語を学習している者が多い。

第７節　生徒の意識

第１項　課題の設定

基礎学校調査の最後に、生徒たちの意識を確認しておこう。

生徒調査の重要な関心は、生徒たち自身がサーミ語やサーミ文化を多く学べるという環境に対してどのように考えているかという点と、教員や保護者の意識との間にギャップがあるか、あるとしたらどのようなものかという点である。

ノルウェーの生徒調査では、前者については生徒自身もサーミ語を学ぶことを積極的に受け入れ、

またそれらがノルウェー語、ノルウェー社会との断絶になるとは考えていないという結果が得られている。また、高校卒業後の進路や生き方までを視野に入れたうえでの、高校選択が行われており、サーミ的な人生と、そうでない人生とがすでに中学校段階時点で絞られ始めているという状況が明らかとなった（野崎 2015：23-24）。後者については、サーミ語、サーミ文化の学習が進学、就職に及ぼす影響をどう評価するかという点で、教員と生徒との間にギャップが見られた（野崎 2015：57）。

これらの結果をふまえた上で、イナリ基礎学校生徒の意識を検討していく。

第２項　回答者の概要

４人の回答者は８年生が３人、９年生が１人である。９年生の１人は女性、８年生の３人は女性が１人と男性が２人である。結果として男女比は半々となった。民族は４人ともサーミであり、また全員が北サーミ語を使うことができる。加えて、ＱとＳの２人はイナリ・サーミ語も使える。

サーミ語の力は高く、とくにＲは話す、読む、聞く、書くそれぞれについて、強い自信を持っている。ただし、普段家庭で使うのはＱが「フィンランド語」、Ｔが「フィンランド語と少しのサーミ語」、ＲとＳが「サーミ語とフィンランド語を半々」であり、どちらかといえばフィンランド語が優勢であるといえる。なお、読むことについては全員が「本が読める」と答えているが、話す、聞くについてはＲ、ＳとＱ、Ｔとの間に自己評価の差が見られる。この差は、普段の使用言語とマッチしており、フィンランド語中心のＱ、Ｔの自己評価がやや低く、半分はサーミ語を使用しているＲ、Ｓの自己評価が高い。先行研究でも見られたように、サーミ語習得に関する家庭の役割の重要性がここでも垣間見えている。

基礎学校卒業後は、全員が進学を希望している。進学先はＱが美容師の専門学校、ＲとＳが高校、Ｔがまだわからないとなっている。進学理由はいずれも「よい職業に就きたいから」であり、最終的にはＱとＲの２人が職業学校まで、ＳとＴが大学までの進学を希望している。Ｓ以外はイナリに住み続ける意思があまりなく、Ｑは将来的には海外への移住を考えており、Ｒもヘルシンキに住みたいとしている。希望する職業を見ても、美容師に管理職、技術職、医師と、決してサーミ的なものではない。

表４－39　回答者の属性、サーミ語能力

	学年	性別	使えるサーミ語	話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと	普段の使用言語
Q	8年生	女性	北サーミ語、イナリ・サーミ語	かなり話せる	本が読める	日常生活の話題がわかる	簡単なメモが書ける	フィンランド語
R	9年生	女性	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	たいていのことならわかる	どんな文書でも書ける	サーミ語とフィンランド語を半々
S	8年生	男性	北サーミ語、イナリ・サーミ語	流暢に話せる	本が読める	たいていのことならわかる	簡単なメモが書ける	サーミ語とフィンランド語を半々
T	8年生	男性	北サーミ語	かなり話せる	本が読める	日常生活の話題がわかる	どんな文書でも書ける	フィンランド語と少しのサーミ語

表４－40　進路希望

	卒業後	進学先	進学理由	学歴希望	職業希望	就職希望先	居住希望
Q	進学	ラップランドの専門学校	よい職業に就きたいから	職業学校	美容師	その他（フィンランドで就職して後に海外へ）	その他（フィンランドか海外）
R	進学	高校	よい職業に就きたいから	職業学校	会社の管理職	ヘルシンキ	ヘルシンキ
S	進学	イヴァロ高校	よい職業に就きたいから	大学（学士課程）	技術職	イナリ	イナリ
T	進学	まだわからない	よい職業に就きたいから	大学（上級修士号/博士課程）	医師	その他（まだわからない）	その他（まだわからない）

第３項　基礎学校への意識

イナリ基礎学校については、「サーミ語を身につけられる」「サーミ語で学ぶので理解しやすい」「サーミ文化を身につけられる」「サーミの友達ができる」については全員が肯定的な評価をしている。逆に、「サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる」「フィンランド語が覚えられない」「フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない」などは、全員が否定的な見解を持っている。基礎学校はサーミ語、文化などを向上させるメリットがあり、またマジョリティ社会とのつながりを切るようなことはないと全員が考えている。

一方、「サーミ語の教材が整っている」に対しては２人が肯定的、２人が否定的と評価がわかれた。サーミ語やサーミ文化の授業を増やすべきかどうかについても、意見は一致しておらず、生徒ごとに考えがあるようである。

進学、就職への影響については、基本的には有利に働くと考えている。ただ、Ｓだけは「就職に有利だ」に対して「あまりそう思わない」と回答している。

表４－42は、サーミ語、文化を学ぶことの影響をより詳細に聞いたものである。「サーミホームランド以外の地域で生活する際には不利になる」については、全員が否定的な見解を持っている。しかし、サーミホームランド以外の地域への進学や就職が不利になるかについては、Ｑが「ややそう思う」と答えている。また、過去の調査でサーミ語教育のひとつの限界とされていた理系科目については、Ｔを除く３人がサーミ語よりもフィンランド語で受けたほうがよいと考えている。

学校への満足度は概して高く、サーミ文化への理解の深まり、サーミ語の力の向上、教員との交流、学生同士の交流の４項目については、全員が「満足」「やや満足」と回答している。そのようななか、サーミ語の教材だけは、Ｒが「やや不満」と回答していた。

表４－41　基礎学校評価

	A. サーミ語を身につけられる	B. サーミ語で学ぶので理解しやすい	C. サーミ文化を身につけられる	D. サーミの友だちができる	E. サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる	F. フィンランド語が覚えられない	G. フィンランドの習慣や文化に触れる機会がない
Q	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
R	そう思う	NA	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
S	そう思う	そう思う	そう思う	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない
T	そう思う	ややそう思う	ややそう思う	そう思う	あまりそう思わない	そう思わない	そう思わない

	H. 教育設備が整っている	I. サーミ語の教材が整っている	J. 進学に有利だ	K. 就職に有利だ	L. もっと公的財政支援を増やすべき	M. サーミ語の授業を増やすべき	N. サーミ文化の授業を増やすべき
Q	ややそう思う	あまりそう思わない	ややそう思う	ややそう思う	NA	あまりそう思わない	あまりそう思わない
R	ややそう思う	そう思う	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	ややそう思う
S	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思う	あまりそう思わない	そう思う	そう思う	そう思う
T	そう思う	ややそう思う	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	そう思わない

表４－42　サーミ語/文化を学ぶことについて、学生生活満足度

	サーミ語、サーミ文化を学ぶこと				学校生活満足度					
	A. 理系科目の学習はサーミ語よりもフィンランド語の方がよい	B. サーミホームランド以外の地域へ進学する際には不利になる	C. サーミホームランド以外の地域で就職する際には不利になる	D. サーミホームランド以外の地域で生活する際には不利になる	A. 授業の内容	B. サーミ文化への理解の深まり	C. サーミ語の力の向上	D. サーミ語の教材	E. 教員との交流	F. 学生同士の交流
Q	ややそう思う	ややそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	やや満足	やや満足	満足	やや満足	やや満足	満足
R	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない	満足	やや満足	満足	やや不満	満足	満足
S	そう思う	そう思わない	そう思わない	そう思わない	満足	満足	満足	満足	満足	満足
T	あまりそう思わない	あまりそう思わない	あまりそう思わない	あまりそう思わない	やや満足	やや満足	やや満足	やや満足	やや満足	やや満足

第４項　サーミ文化の継承

生徒４人のサーミとしての意識は高く、ＲとＳが「つねに意識している」、ＱとＴが「時々意識する」と答えている。意識する場面としては、Ｑはすべての場面を選択し、Ｓは「サーミ以外の人々と関わるとき」だけを指摘している。

では、彼らにサーミ語、サーミ文化を伝えているのはだれか。基礎学校入学前にサーミ語、サーミ文化を習ったかどうかについて、ノルウェー調査では家庭において両親、とくに母親からサーミ語やサーミ文化を継承するケースが過半数となっていた。それに対し、イナリ基礎学校の生徒の場合、家庭での継承はあまり活発ではない。ＱとＳは両親、祖父母からサーミ語を習っていない。Ｒが父親と祖父、Ｔが母親から習っているくらいである。ＱやＳが、親にかわってサーミ語の教育を受けていたのが、「言語の巣」であった。また、Ｒもその他として幼稚園をあげている。現時点でのサーミ語は、家庭で自然と伝わっていくものではなく、学校やそれに類する機関の役割が大きくなっている。

サーミ文化については、Ｒは入学前にそもそも習っていない。Ｑが父親から、Ｓがソフト、親戚、きょうだいから、Ｔが母親から文化を習っている。サーミ語と異なり、文化の場合は言語の巣や幼稚園の役割は小さく、家庭内での継承が強くなっているようである。

最後に将来の生活の仕方をきくと、Ｒが「サーミとして積極的に生活していきたい」と答えているほかは、３人とも「とくに民族は意識せずに生活していきたい」と回答している。

表４－43　サーミとしての自覚（複数回答）

	サーミとしての自覚	家族でサーミのことを話題にするとき	家族でサーミの文化を実践するとき	家族以外のサーミの人々と関わるとき	サーミ以外の人々と関わるとき	サーミの文化や歴史に触れたとき	サーミ語に触れたとき	サーミの人々の身体的特徴に気づいたとき	サーミであることで差別を受けたとき	その他
Q	時々意識する	○	○	○	○	○	○	○	○	×
R	常に意識している	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA	NA
S	常に意識している	×	×	×	○	×	×	×	×	×
T	時々意識する	×	×	×	×	×	×	×	×	○（わからない）

表４－44　基礎学校入学前にサーミ語・サーミ文化を習いましたか（複数回答）

			父親	母親	祖父	祖母	親戚	きょうだい	言語の巣	その他
サーミ語	Q	はい	×	×	×	×	×	×	○	×
	R	はい	○	×	○	×	×	×	×	○（幼稚園）
	S	はい	×	×	×	×	×	○	○	×
	T	はい	×	○	×	×	×	×	×	×
サーミ文化	Q	はい	○	×	×	×	×	×	×	×
	R	いいえ	－	－	－	－	－	－	－	－
	S	はい	×	×	○	×	○	○	×	×
	T	はい	×	○	×	×	×	×	×	×

表４－45　どのように生活していきたいか

	どのように生活していきたいか
Q	特に民族は意識せず生活していきたい
R	サーミとして積極的に生活していきたい
S	特に民族は意識せず生活していきたい
T	特に民族は意識せず生活していきたい

第５項　小括

生徒たちもまた、サーミ語やサーミ文化を学ぶことを高く評価し、フィンランド語や習慣・文化の習得への不安をまったく感じていなかった。これが生徒調査の第１の知見といえる。ノルウェー調査と異なり、周囲にはサーミでない学友もいる状況であるが、そのような友人との関わりが減ることも心配していない。サーミ語・文化への意識はきわめて高いといえる。

第２の知見として、全員が高いサーミ語能力を持つが、その能力の自己評価と、家庭での言語の使用状況とは比例しており、家庭でもサーミ語を多く使っている生徒の方が能力は高い傾向にあった。これは家庭がサーミ語の継承において重要であることを意味している。しかし、家庭だけで十分であるということではないようで、４人のうち、入学前に親からサーミ語を直接学んだ者は２人だけであり、２人は言語の巣の影響を受けていた。

第３に、サーミ語・文化への高い意識は、将来の進路や仕事にまで影響を与えるものではなかった。４人の希望する職業はいずれもサーミ特有のものではない一般的な職であり、また将来住みたい場所でもサーミのホームランドをあげたのは１人だけであった。進路や将来の自分とは切り離してサーミ語やサーミ文化を考えていることがわかる。

第４に、学校での教育内容や教育環境については、意見がわかれていた。教育設備については、全員が整っていると感じているが、サーミ語の教材が揃っているかについては判断が分かれている。また、サーミ語やサーミ文化の授業を増やすべきかについても、意見は２対２に割れていた。

第８節　調査のまとめ

イナリ基礎学校の３種類の調査から浮かび上がってくる、フィンランドのサーミ教育をめぐる現状を最後にまとめておく。

イナリ基礎学校は、３つのサーミ語方言を母語として選択できる唯一の基礎学校であるというほかはあくまでも一般の公立学校であり、児童・生徒もサーミではない子どもの方が多い。そのような状況ではありながら、教員も、保護者も、生徒も、サーミ語、サーミ文化を学ぶことの意義を認めていた。日本で問題となるような、民族教育を受けることでマジョリティの言語や文化との隔絶が生まれる、あるいは進学、就職に不利に働くといった議論とは、イナリ基礎学校はまったく無縁である。

また、このような意識がサーミのみから出てきているわけではなく、非サーミの教員、保護者においても共有されている点が特徴といえるだろう。むしろ、教員調査などで見られたように、非サーミの教員の方がサーミ政策等に対してより急進的な考え方を見せる例もあった。もっとも、非サーミの教員、保護者といえども、その多くはサーミ語を使え、また配偶者をはじめとする身内にサーミの人がいることから、この地域においてサーミか非サーミかという線引きは非常に曖昧なものとなっているともいえる。

教員、保護者、生徒それぞれの意識を比較すると、そこにギャップが表れている例もいくつか見られた。基礎学校でサーミ語が身につけられることに関しては、三者それぞれが共通して高く評価している。しかし、「サーミ語の授業を増やすべき」かという問いについては、教員は全員が肯定的な意見を持ち、保護者も 10 人中７人が肯定的であったのに対し、生徒は４人中３人が否定的であった。「サーミ文化の授業を増やすべき」かに対しても、教員が５人中４人、保護者が 10 人中８

人肯定しているなかで、生徒は２人が肯定的、２人が否定的となった。現状でも足りないと考える大人たちと、現状で十分であるという子どもたちの対比が浮き彫りになっている。

また、「理系科目の学習はサーミ語よりもフィンランド語の方がよい」に対しては、保護者で11人中10人までもが否定的な見解を持っていた。しかし、実際に勉強をしている生徒たちの意見を見ると、４人のうちサーミ語でよいと思っているのは１人だけで、残りの３人はフィンランド語の方が学びやすいと感じていた。

フィンランドのサーミ語、とくにイナリ・サーミ語やスコルト・サーミ語において、現在の教員や保護者層は、上の世代からの継承がなかなかできておらず、逆に下の世代への継承は活発化している状況である。そのようななかで、さらなる充実を求める教員、保護者層と、現状にある程度満足している生徒層とでギャップが生じている。現在の生徒たちが保護者の年代になり、また教員となって教育する側となった時に、これらのギャップがどのように埋まっていくのかが注目される。

注

１）以下の記述は、主にFNBE（2015）を参考にした。

２）進学のための条件を満たすことができなかった生徒､希望する学校に入学することができなかった生徒、進路を決めることができなかった生徒などに学習の場を提供している（渡邊2014）。

３）フィンランドの教育制度の歴史的な変遷に関しては、主にAho, Pitkänen and Sahlberg（2006）を参考にした。

４）Eurypedia の https://webgate.ec.europa.eu/fpfis/mwikis/eurydice/index.php/Finland:Organisation_and_Governance 参照。

５）言語教育に加えて、「手工芸」などの芸術系科目も重視されていると評価されている（渡邊2011, 2013a）。

６）その他の３科目に関しては、以下のうちから３科目を選択する。第二公用語、外国語、数学、一般教科（人文科学・自然科学など）のうち１科目（FNBE 2015：19-20）。

７）本項の記述は、庄司（1990, 1991）、吉村（1993）、山川（1999, 2005）、Aikiko-Puoskari（1998）、Kulonen, Seurujärvi-Kari and Pulkkinen eds.（2005）を参考にした。

８）たとえば、以下のような報告書が提出されている（庄司1990, 1991）。

- 「サーミ人の教育開発に関する報告書」（1971）
- 「基礎学校教育計画委員会報告書」（1971）
- 「サーミ委員会報告書」（1973）
- 「サーミ語教育計画委員会報告書」（1973、1974）

９）こうした試験的な取り組みは、当時の学校教育法において「ラップ語を話す児童は、状況が許す限りにおいて、彼らの母語でも教育をうける」権利が保障されていた点にもとづいている（Kulonen, Seurujärvi-Kari and Pulkkinen eds. 2005：92）。

10）統合した教科としての「フィンランド語―サーミ語」の一部としてサーミ語が教えられた（Aikio-Puoskari 1998）。

11）こうした1980年代の動向の背景には経済的な好況が存在していると解釈されている（Aikio-Puoskari 1998）。すなわち、そうした経済的な状況が、基礎自治体を、直接的な義務はない種類

の教育に関して改善を行うようにも促したという。

12）ラッピ県庁が中心となり現職の教師によって構成される作業グループによって作成される（山川 2005）。

13）なお、分母を 16－18 歳人口としているが、16－18 歳以外の年齢層もフィンランドの高校には入学しているため、その意味で近似的な値となっている。

14）イナリ基礎学校に関するデータは、2014 年および 2015 年に訪問した際の校長への聞き取りによっている。

15）たとえば、フィンランド大使館 HP など。

参考文献

Aho E., Pitkänen, K., and Sahlberg, P., 2006, *Policy development and reform principles of basic and secondary education in Finland since 1968*（Washington, DC, World Bank, Education Working Paper Series 2.）

Aikio-Puoskari, U., 1998, "Sami language in finnish schools", in Kasten, E. ed., *Bicultural Education in the North: Ways of Preserving and Enhancing Indigenous Peoples' Languages and Traditional Knowledge*（Munster, Waxmann Verlag）, 47-57.

Finnish national board of education（FNBE）, 2015, *Finnish education in a nutshell*（http://www.oph.fi/download/146428_Finnish_Education_in_a_Nutshell.pdf）.

Keskitalo, P., Määttä, K., and Uusiautti, S., 2012, "Sámi education in Finland", *Early Child Development and Care*, 182(3-4), 329–343.

Kulonen, U.-M., Seurujärvi-Kari, I., and Pulkkinen, R., eds., 2005, *The Saami――A Cultural Encyclopaedia*（Suomalaisen Kirjallisuuden Seura, SKS）

野崎剛毅 , 2013,「サーミ学校保護者の教育意識と民族意識」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 29　ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 119-127.

――――, 2015,「基礎学校生徒の意識」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 32　ノルウェー・フィンマルク地方におけるサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 13-24.

小野寺理佳 , 2015,「基礎学校教師の教育実践と意識」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 32　ノルウェー・フィンマルク地方におけるサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 37-56.

品川ひろみ , 2015,「基礎学校保護者の教育意識と民族意識」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 32　ノルウェー・フィンマルク地方におけるサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 24-37.

新藤慶 , 2013,「サーミ学校教師の教育実践と意識」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 29　ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室 , 109-118.

庄司博史 , 1990,「サーミ文化復権と文語の確立」小谷凱宣編『北方諸文化に関する比較研究』名古

屋大学教養部 , 149-171.
————, 1991,「サーミ民族運動における言語復権の試み」『国立民族学博物館研究報告』15(3), 847-910.
Virolainen, M., and Stenström, M.-L., 2015, *Recent Finnish VET Reforms and Innovations: Tackling The Current Challenges* (Nord-VET - The future of VET in the Nordic Countries).
渡邊あや , 2011,「教育制度・教育課程の観点から見たフィンランドの教育と PISA」『日本生活体験学習学会誌』11, 1-9.
————, 2013a,「フィンランドの教育課程」勝野頼彦編著『諸外国の教育課程と資質・能力――重視する資質・能力に焦点を当てて（教育課程の編成に関する基礎的研究報告書６）』国立教育政策研究所 , 49-56.
————, 2013b,「フィンランド」文部科学省『諸外国の教育行財政』ジアーズ教育新社 , 215-235.
————, 2014,「フィンランドの教育行政制度」河野和清編著『新しい教育行政学』ミネルヴァ書房 , 225-235.
————, 2015,「フィンランド――「全ての子供に質の高い就学前教育を」という目標を掲げ義務化」渡邊恵子編著『諸外国における就学前教育の無償化制度に関する調査研究（初等中等教育の学校体系に関する研究報告書１）』国立教育政策研究所 , 95-110.
山川亜古 , 1999,「北欧のサーミ語事情――言語回復への歩み：フィンランドを中心に」『ことばと社会』２, 97-121.
————, 2005,「多文化社会の言語的人権を保障する学校教育――先住民族サーミの人々と母語教育・文化継承」庄井良信・中嶋博編著『フィンランドに学ぶ教育と学力』明石書房 , 202-233.
吉村博明 , 1993,「サーミ関連立法――フィンランドを中心に」『外国の立法』32（2・3), 39-70.

インターネット資料

Eurypedia, Finland, Organisation and Governance
フィンランド大使館（http://www.finland.or.jp/public/default.aspx?nodeid=46052&contentlan=23&culture=ja-JP）
OECD Teachers' salaries Annual statutory salaries in public institutions（http://www.oecd-ilibrary.org/education/teachers-salaries_teachsal-table-en）

（はじめに・第１節～第３節：上山浩次郎、第４節～第８節：野崎　剛毅）